

第1章 嬉野市の特性と問題点

1-1 嬉野市の概況

1. 位置

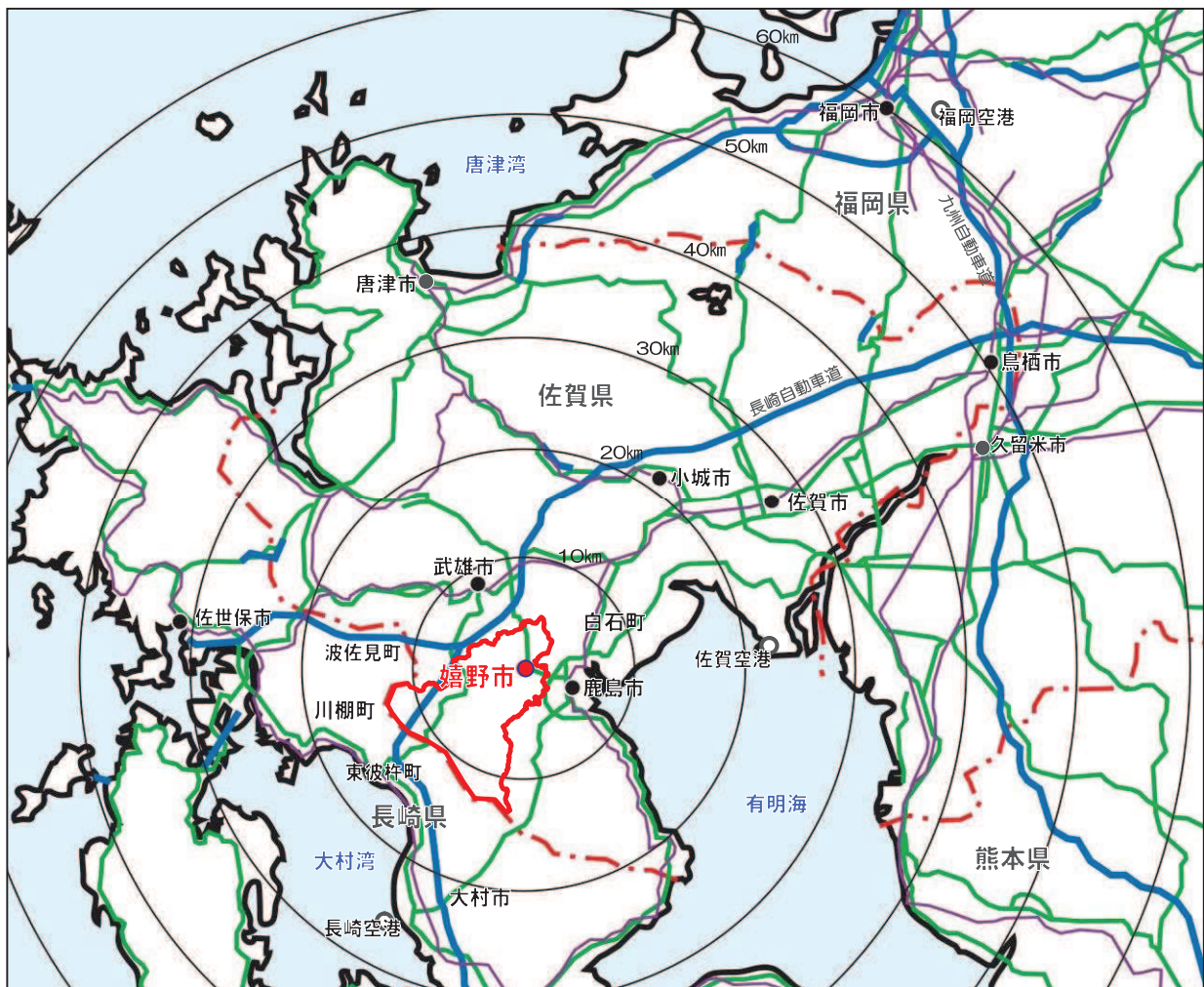
嬉野市は、長崎県と接する佐賀県南西部地域に位置し、北を武雄市と長崎県波佐見町、東を鹿島市と白石町、西・南を長崎県東彼杵町と同川棚町にそれぞれ隣接しています。さらに、直線にして佐賀市から約27kmの距離に位置し、福岡市から約60kmの圏域にあります。

本市は北部九州有数の温泉地を擁するとともに、「うれしの茶」や長崎街道の面影を残す歴史的町並みなどの観光資源に恵まれており、主に観光地として発展してきました。

これに対し、現在の広域的な連携手段は長崎自動車道のみとなっていますが、現在建設が進められている九州新幹線西九州ルートにおいて、嬉野温泉駅の設置が予定されており、都市活動・交流圏の拡大によって、観光都市を機軸に広域圏における重要な地位を担うことが期待されています。

※法令上の名称は「長崎ルート」ですが、本都市計画マスタープランにおいては、JR九州が優先使用する呼称を用いることとします。

図 広域的位置



2. 沿革

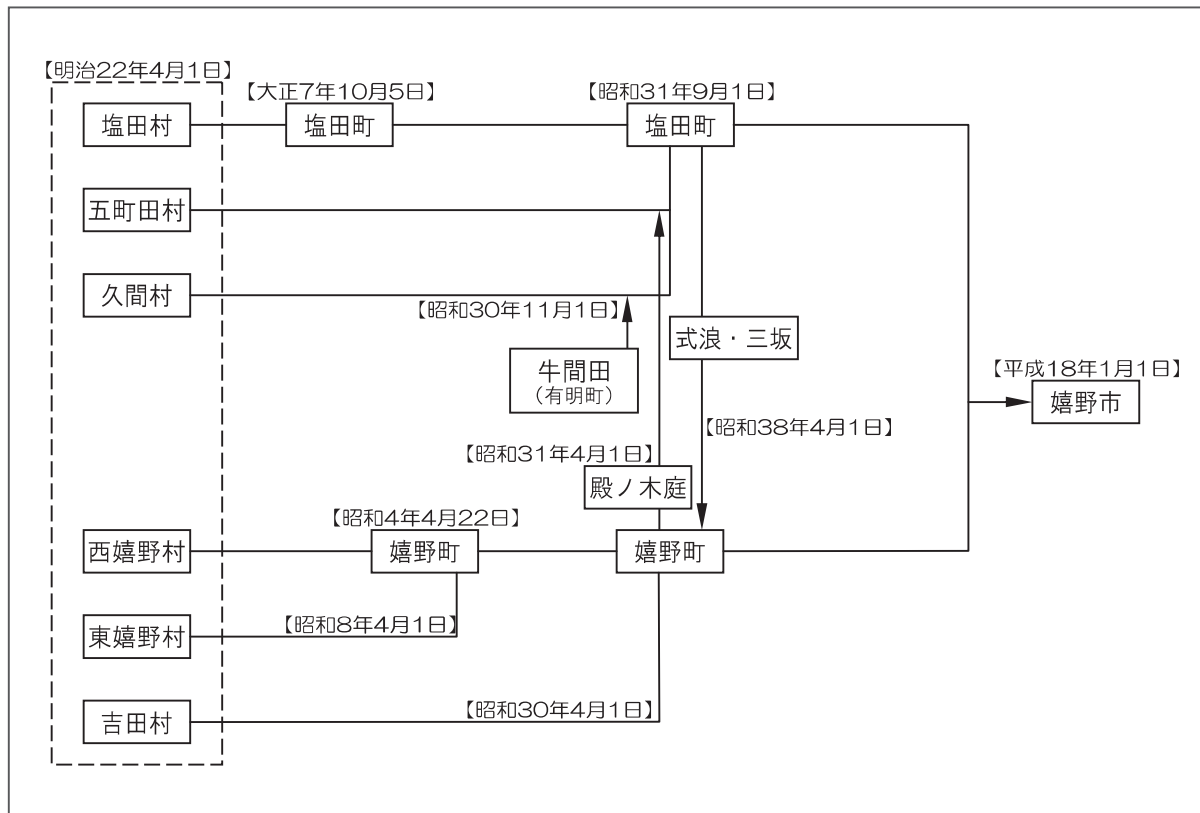
嬉野市は、平成18年1月1日に塩田町と嬉野町の2町の合併によって誕生しました。合併時点の市域面積は126.51km²で、佐賀県内20市町中9位の30,379人（佐賀県統計調査課）※の人口を有しています。

その沿革をみると、まず明治22年4月1日の町村制施行によって、塩田村、五町田村、久間村、西嬉野村、東嬉野村、吉田村が発足し、大正7年10月5日に塩田村が塩田町に、昭和4年4月22日に西嬉野村が嬉野町に、それぞれ町制へ移行しています。町制施行後も、嬉野町では昭和8年4月1日に嬉野町と東嬉野村と合併を行い、さらに昭和30年4月1日に町村合併法によって吉田村を合併し、新しい嬉野町となりました。一方、塩田町も昭和31年9月1日に久間村（昭和30年11月1日に牛間田を編入）と五町田村（昭和31年4月1日に殿ノ木庭を編入）を取り込んでいます。

その後、昭和62年に改正された市町村合併特例法（平成17年3月31日失効）と平成17年4月1日に施行された「市町村の合併の特例等に関する法律」によって進められた全国的な市町村合併の中、平成18年1月1日に塩田町と嬉野町が合併し、嬉野市が新設されました。

※平成17年国勢調査による人口及び世帯数を基礎とし、動態の数値を加減して算出したものです。

図 沿革



3. 特色・地域資源

(1) 歴史街道 ～ 長崎街道の宿場町 ～

長崎街道は江戸期において豊前国小倉（北九州市）から肥前国長崎（長崎市）に至る旧街道で、嬉野市内には嬉野宿と塩田宿（塩田津）が置かれました。

塩田町の中心部に位置する塩田津は、長崎街道の宿場町であると同時に、有明海の潮汐を水運に利用した塩田川の川湊町でもあり、焼き物などこの地方の物産が集積する物資輸送の中継点として発展し、「居蔵造り」と呼ばれる商家の重厚な建物が連なる商家町が形成され、佐賀南西部における政治・経済の中心となりました。一方、嬉野宿は大村領から佐賀領に入る重要な宿場であるとともに、大名から一般庶民まで多くの人々が利用する湯宿として栄えてきました。

しかしながら、塩田津については、塩田川の度重なる氾濫で、宝永2年（1705）からは現在の武雄市から嬉野宿に直接向かうルートに本道が切り替えられ、さらに江戸末期には次第に有明海沿いに物資輸送の経路が移ったことで、その地位が低下していきました。

現在、塩田津では、国道498号線西側の旧道沿いに長崎街道の面影が残っており、良好な歴史的景観として保存・整備が進められています。また、宿場町が栄えていた当時に台頭した「塩田石工」と呼ばれる石職人は、全国各地の寺社の仁王像などを手掛けていますが、嬉野市内にも独特な石垣や仁王像、恵比寿像などが点在しています。



(2) 文化的原風景 ～ 兎鹿野の棚田・岩屋川内の茶畑～

棚田は灌漑技術が向上し平野部で稲作が発達する以前の古い農地スタイルであり、困難な営農条件から、年々耕作放棄地が拡大してきましたが、近年は日本の文化的原風景として再評価されています。

嬉野市内では、(主)鹿島嬉野線を国道34号との交差点から鹿島方面に約2km進んだあたりの兎鹿野地区の斜面地に、佐賀南部地域最大級の棚田が広がっているほか、山間部には多くの棚田が残っています。

一方、お茶の生産が盛んな本市では、虚空蔵山に向かう塩田川上流の山間や、(主)大村嬉野線を進んだ岩屋川内川沿いなどに、棚田とともに段々の茶畑が広がっており、嬉野市の特徴的な風景を形成しています。

※本書では路線名称については主要地方道を(主)、一般県道を(一)と記します。



(3) 観光保養地 ～ 美肌の湯・嬉野温泉 ～

嬉野温泉は、傷を負った白鶴が湯浴みをしたという逸話が残り、奈良時代初期に編纂された肥前風土記にも万病に効く名湯として記録されており、その泉質は「にっぽんの温泉100選」においても高い評価を得ています。

江戸時代に長崎街道の宿場町として栄えた後、歓楽温泉としての特色が強くなってきており、塩田川沿いに温泉旅館が並ぶ温泉街の風景は、独特の情緒を醸し出していますが、隣接する商店街には風俗店も多く立地しており、団体旅行から個人旅行へと旅行のスタイルが変化する中、泉質や知名度、施設面での高い評価に対し、温泉地・温泉街としての雰囲気づくりが課題となっています。



にっぽんの温泉100選 観光経済新聞社が主催、日本政府観光局や日本観光協会をはじめ観光関連9団体が後援する旅行会社の投票（推薦）で決まる温泉地ランキング

一気にこゝまで来た、行乞三時間。

宿は新湯の傍、なか／＼よい、よいだけ客が多いのでうるさい。

飲んだ、たらふく飲んだ、造酒屋が二軒ある、どちらの酒もよろしい、酒銘「一人娘」「虎の児」。

武雄温泉にはあまり好意が持てなかった、それだけこの温泉には好意が持てる。

湯出量が豊富だ（武雄には自宅温泉はないのにこゝには方々にある）温度も高い、安くて明るい、普通湯は二銭だが、宿から湯れを貰へば一銭だ。

茶の生産地だけあって、茶畑が多い、茶の花のさみしいこと。

嬉野はうれしいの（神功皇后のお言葉）。

休みすぎた、だらけた、一句も生れない。

ぐっすり寝た、アルコールと入浴とのおかげで、しかし、もつと、もつと、しつかりしなればならない。

『行乞記』（種田山頭火）より

(4) 九州新幹線嬉野温泉駅への道のり ～県内初の電車～

嬉野市では、現JR長崎本線を鉄道不誘致によって逸した後、大正4年12月に県内初の電車・肥前電気鉄道が塩田～嬉野間に開業しましたが、同鉄道が昭和7年に廃止されて以降、交通便利性における不利な地理的条件にありました。

しかしながら、現在進められている九州新幹線西九州ルートを整備では、嬉野温泉駅の設置が盛り込まれており、念願であった博多駅（福岡県）に直結し全国と嬉野市を結ぶ鉄道が誕生することになります。

一方、廃止された肥前電気鉄道の軌道跡は、現在は一部が道路として利用転換されているほかは、石積みの橋台や路盤跡などが、僅かに当時の面影を残すのみとなっています。

4. 自然条件

(1) 地形・地盤

嬉野市は山地・丘陵地とそれらに囲まれた盆地、並びに有明海側に開けた平地で形成されています。

本市の基盤となっている杵島層は約3000万年前に古第三期を通じて堆積したとみられており、地形構造をみると、北東の平野部と西部から南部にかけて山間部に分けられ、虚空蔵山を源として北東から南西に流れる塩田川が、嬉野町と塩田町を結んでいます。

市西部に位置する嬉野町は、下宿丘陵が位置し、藤津層と呼ばれる安山岩の上に形成されています。その最西端には2000万年前に噴火した虚空蔵山（608m）がそびえ、残丘（モナドノック）の孤峰を形作っています。

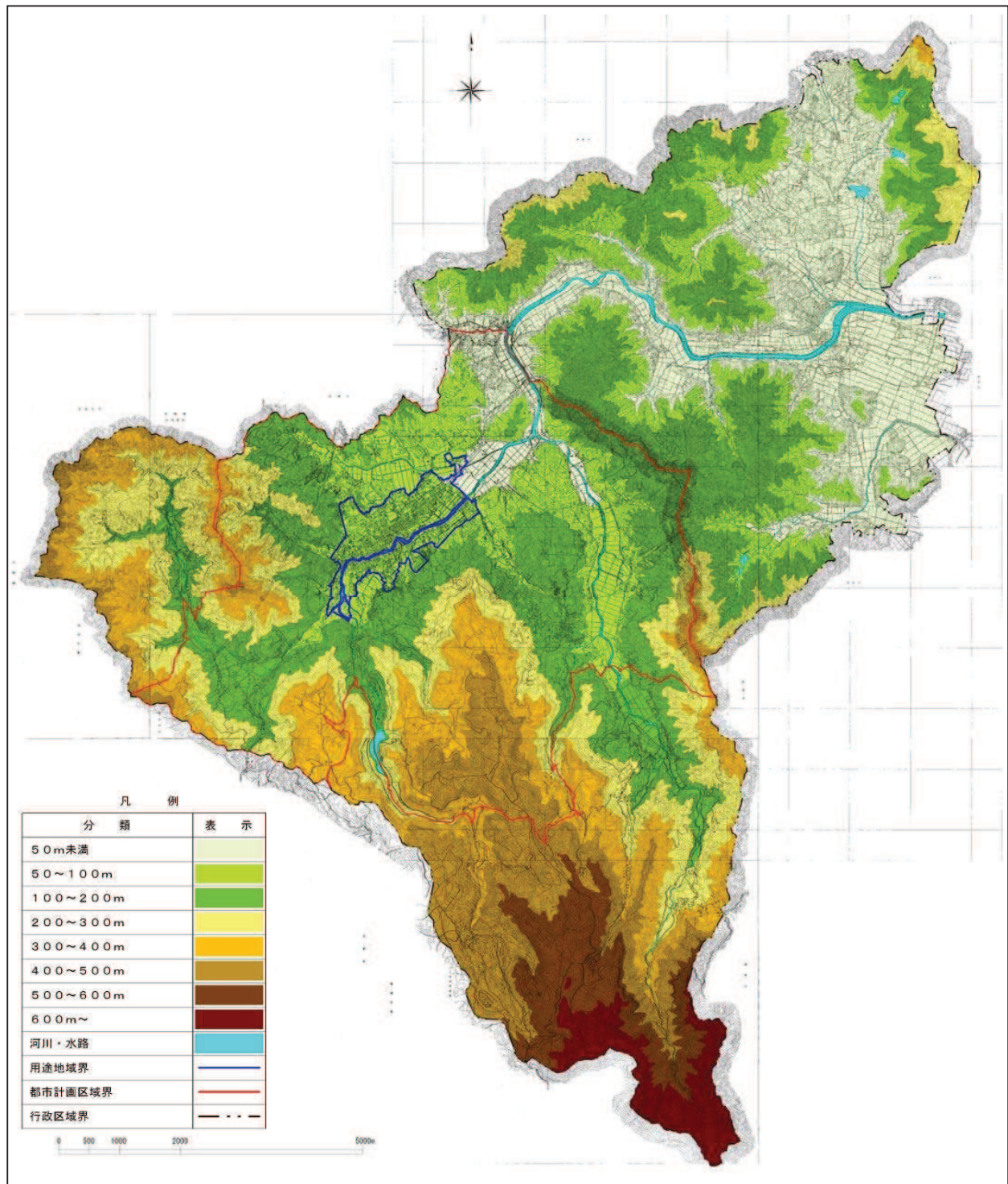
同地区は周囲を山、あるいは丘陵に囲まれた盆地となっており、塩田川が東西に横断し、盆地の中心部に広がる塩田川沿いの平坦地に温泉街を主とする市街地や農地が形成されています。また、周囲の山々の傾斜地や山麓部分では棚田や茶畑がつくられ、水田や茶栽培などに利用されており、特産品であるお茶が栽培されています。

一方、市東部の塩田地域は、唐泉山と杵島山の間に展開しており、なだらかな平野部には水田地帯が形成されています。有明海側に一部干潟の地層があるものの、その他は全域が比較的安定した地盤となっており、鹿島市に隣接する区域の東半分と塩田川沿いに広がる海拔50m未満の平野部では、水稻を主とする農地が整備され、自然環境と共生した土地利用が図られています。

さらに市域中央部において嬉野町と塩田町両方のランドマークとなっている唐泉山（410m）は、多良岳の寄生火山として生い立ちを同じくしており、地質的には虚空蔵山と同じく火砕岩と溶岩の互層となっています。

このように、本市には特に軟弱地盤はみあたらず、山間部も岩盤であるため地震による被害は比較的小さいものと考えられています。しかしながら、一部の平野部を除き、市域の多くが塩田川流域の狭い平坦地で背後に山々が迫っており、地震や大雨によって崩壊するおそれのある傾斜角30度以上の急傾斜地が多く分布しています。

図 地形・水系



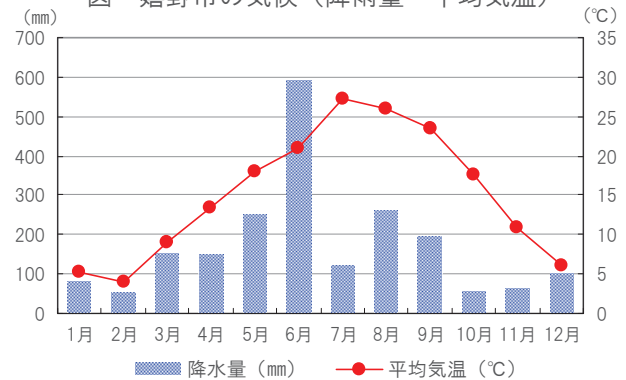
(2) 気候

平成20年の気象データをみると、嬉野市は、夏場の7、8月頃に日平均気温が25℃を超え、最高気温は35℃前後まで上がっていますが、冬の2月前後になると日平均気温は5℃以下となり、最低気温も氷点下5～6℃にまで下がるなど、年間を通じて気温の変化が大きい地域となっています。

最近20年間（平成元年～平成20年）における年平均降水量の状況は、平成6年の1,106mmから平成5年の3,219mmまでと幅広く、概ね2,000mmから2,500mmの間で推移しており、平均して約2,150mmと比較的降水量が多い地域に属しています。

また、年間を通じて北部九州では比較的穏やかな1～2m/sの風が、主に北北西から吹いています。

図 嬉野市の気候（降雨量・平均気温）

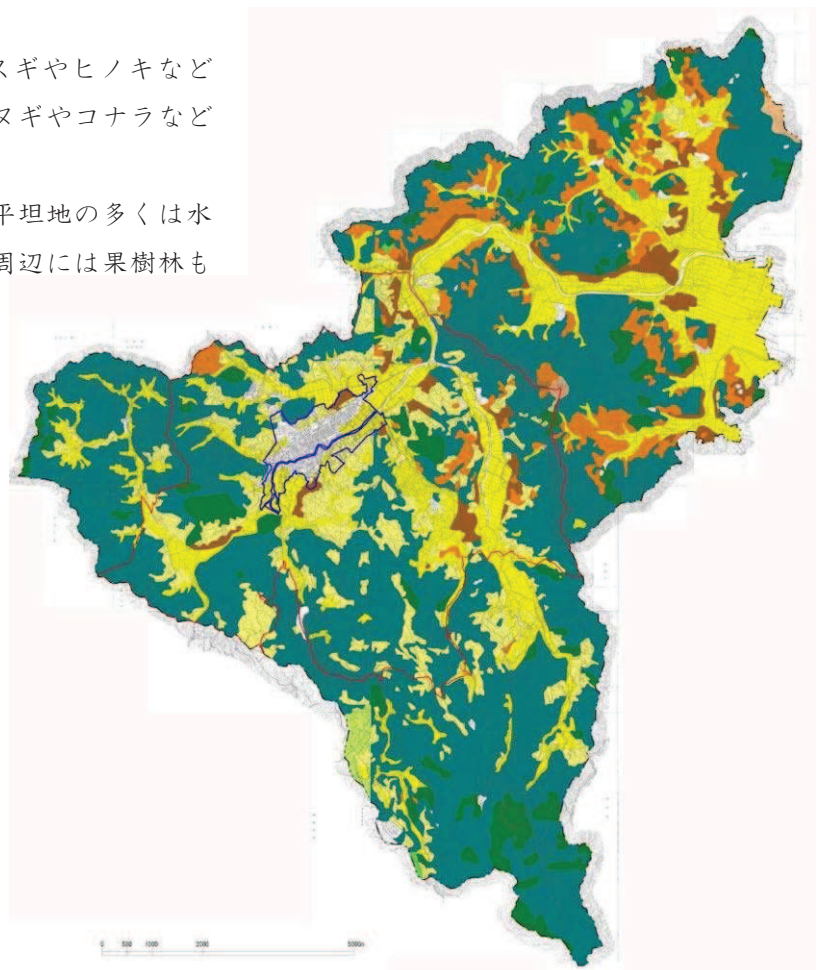


(3) 植生

嬉野市では山間部においてスギやヒノキなど植林地が広がっているほか、クヌギやコナラなどの雑木林も点在しています。

また、平野部や山間の僅かな平坦地の多くは水田や畑に利用されており、その周辺には果樹林も見られます。

凡 例	
分 類	表 示
自然林	該当なし
スギ・ヒノキ等の植林地	濃緑色
クヌギ・コナラ等の二次林	緑色
竹林	黄緑色
ススキ・ササ等の草地	黄褐色
水田	黄色
畑	淡黄色
果樹林	オレンジ色
住宅・公園等の植栽地	茶色
その他	薄茶色
用途地域界	青い実線
都市計画区域界	赤い実線
行政区境界	黒い点線



1-2 上位関連計画の整理

1. 上位計画

- 「歓声が聞こえる嬉野市」を将来像に、都市特性を生かした個性的なまちづくりを目指します。
- 嬉野町においてのみ、都市計画区域マスタープラン（都市計画区域の整備、開発及び保全の方針）が示されています。

（1）嬉野市総合計画

【目標年次】

平成29年度

【目標人口】

目標値28,800人（平成29年） ※予想値27,000人

【将来像とまちづくりの基本目標（大綱）】

嬉野市に有する“資源”や“もの”は先人たちが築いてきた歴史として今に引き継がれ、嬉野市の資産であります。

これらのものを市民共有のものとし、守り育てながら、嬉野市ならではの特性を生かした地方の時代にふさわしい個性的なまちづくりと、市民が夢と希望を持って住み続けることができるまちづくりを進めるため、嬉野市の将来像を次のように定めます。

歓声が聞こえる嬉野市

①世代をこえて住み続けるまち

市民一人ひとりが尊重し合い、ボランティアの意識を持って互いに支えあい、全ての人にやさしく安心していきいきと暮らせるまちを目指します。

②個性輝く魅力あふれるまち

自然環境に配慮し、地域の特徴と立地条件を生かした個性あるまちづくりを進めます。

③活力ある自治先進のまち

「ひとにやさしいまちづくり」をはじめとする先駆的なまちづくりや良好な景観づくりを推進するとともに、地域力を高めるための自治組織の育成を支援し、地域情報化の環境整備を推進します。

④みんなで創る自立のまち

市民協働によるまちづくりを目指し、それぞれの地域や団体が自立できる体制づくりを支援します。

【土地利用の基本方針】

土地利用については、安心・安全な嬉野市をつくるために、市街地では利用の高度化、周辺地域では農用地と森林の適切な保全と有効利用を促進するとともに、地域の特性を踏まえながら土地利用計画を策定し、総合的かつ計画的な土地利用を図ります。

(2) 佐賀県総合計画2007

【位置づけ】

この計画は、10年後の佐賀県の姿を見据えながら、その実現に向けて、県知事のマニフェストサイクルに合わせた4年間に必要な方策を明らかにするもので、県政運営の基本となるものです。

【基本理念】

「くらしの豊かさを実感できる 佐賀県」の実現

【政策の柱】

- 安心して子育てができる環境づくりや、チャレンジドが地域で自立できる環境づくり、誰もが暮らしやすいまちづくりなどを進める「健康で暮らしやすい 佐賀県」
- チャレンジドの雇用の拡大や、企業における労働力の正社員化、女性の社会参画の推進などを進める「誰もが活躍できる 佐賀県」
- 新エネルギーの導入促進や研究支援、地球環境の保全などを進める「地球環境時代のトップラナー 佐賀県」
- こどもの個性を伸ばす教育環境や、県民の知的ニーズに応える「学び」の環境づくりを進める「学びきらめく 佐賀県」
- 環境保全型農業の取組拡大など農林水産業の振興、企業誘致や県内企業の強化を進め、佐賀県ブランド力を高める「活力あふれる 佐賀県」
- 九州新幹線西九州ルートや西九州自動車道、有明海沿岸道路の整備など、産業の発展や観光の振興のための基盤整備を進める「未来ひろがる 佐賀県」

(3) 嬉野市国土利用計画

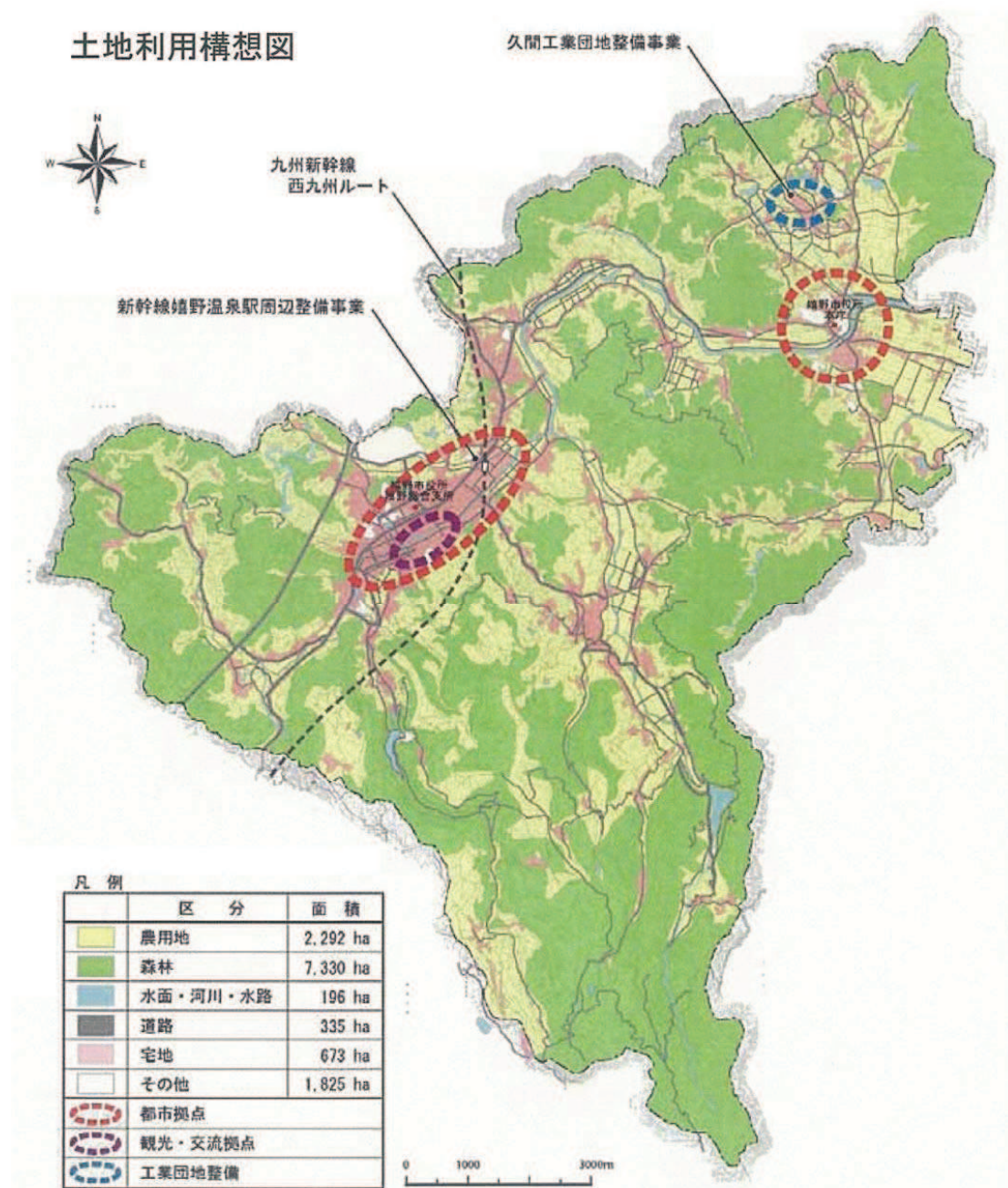
【位置づけ】

将来に向けた計画的な土地利用の推進に向けた指針であり、国土利用計画法第8条の規定に基づき策定された佐賀県国土利用計画を基本とし、嬉野市総合計画に即して定めています。

【基本方針】

- 1) 美しい自然環境、農業的土地利用の保全と有効活用
- 2) 貴重な歴史的資源・文化的環境の保全と景観形成
- 3) 九州新幹線の整備効果を活かし、都市機能の集積、住宅地の整備等による魅力ある市街地形成、保養型、滞在型、体験型の健康保養地形成

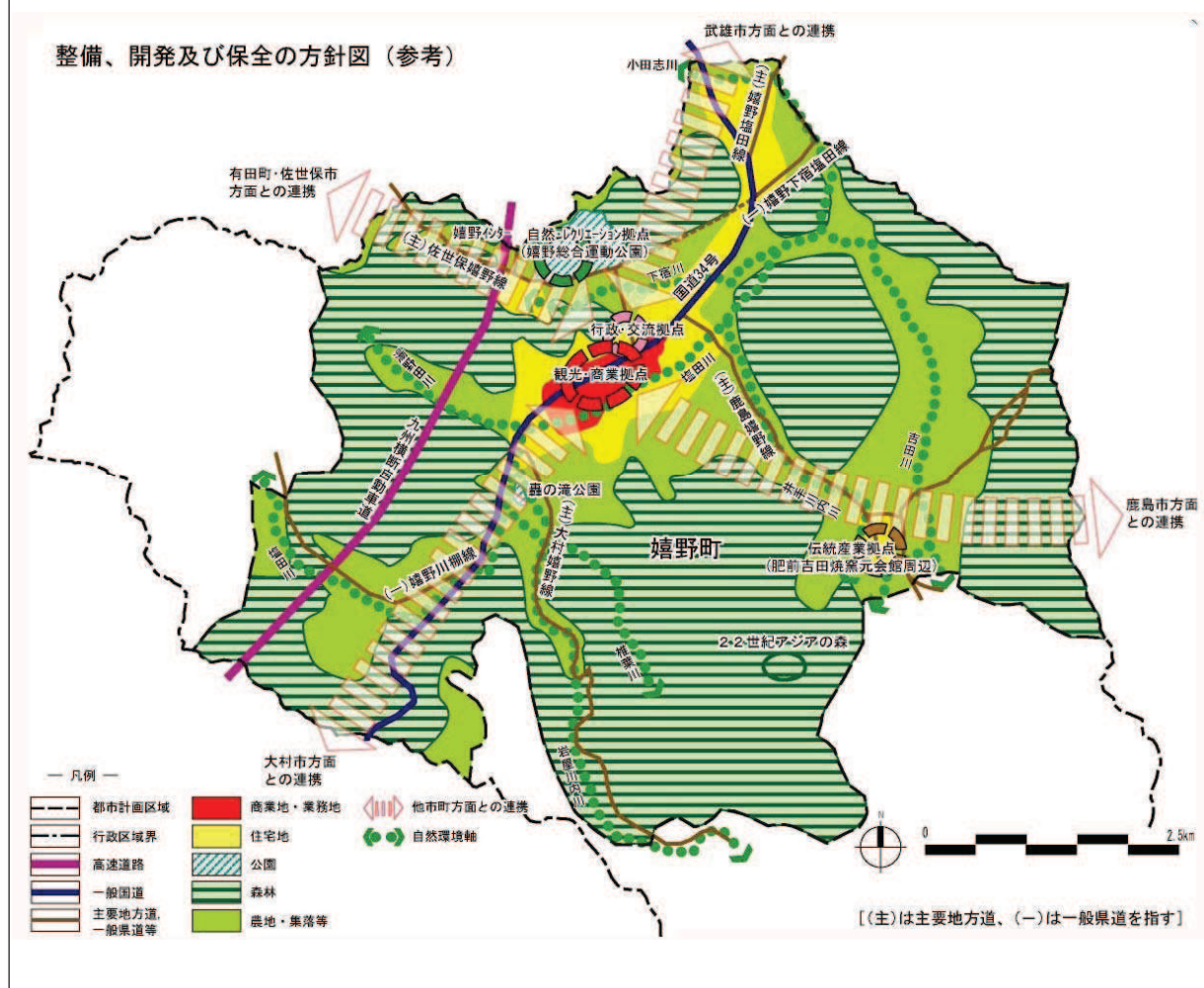
土地利用構想図



(4) 嬉野都市計画区域マスタープラン（嬉野都市計画区域の整備、開発及び保全の方針）

将来ビジョン	整備の方向
保養型観光地としての魅力を高め、武雄市・鹿島市など周辺都市との交流が盛んなまち	■保養型観光地としての特性を活かした中心市街地の活性化 ■鹿島市や武雄市をはじめ、周辺都市との連携・交流を促進する幹線道路の整備の促進
温泉などの特有の資源を活かした、良好な居住環境を提供できるまち	■良好な居住環境の形成 ■ユニバーサルデザイン（※）の理念に基づく安全で安心して暮らせるまちづくり
水や緑の優れた自然的環境を活かすまち	■山々の緑、棚田、優良農地などの保全と活用 ■潤いや安らぎの場としての河川空間の活用

※ユニバーサルデザイン：年齢、性別、身体、国籍などに左右されることなく、できるだけ多くの人が使いやすいように、建物、環境、製品などをデザインすること



2. 主要関連計画

(1) 嬉野市公共下水道計画

【計画策定の趣旨】

嬉野市中心部を含む嬉野町内の区域を対象に、旅館及び住居からの汚水流入による塩田川の水質悪化や、周辺湖畔における排水管の露出等による景観阻害を改善し、観光都市としてのイメージアップと生活環境の向上を図るために策定した下水道整備の計画。

(2) 嬉野市環境基本計画

【計画策定の趣旨】

嬉野市の良好な環境を維持し、次世代に引き継ぐための、取り組みの方向性と市民・事業者・行政の役割分担を定めた計画。

【環境像】

豊かな自然と共生する魅力あふれるまち 嬉野

【重点施策】

- 河川環境の保全（河川工事に伴う生態系への配慮）
- 3Rの推進（市事務事業における3Rの推進）
- 地球温暖化防止対策の推進（市事務事業における温室効果ガス排出量削減対策の推進）
- 環境美化活動の推進（環境美化に関する行事・イベント・講演会等の推進）

【生活基盤整備における環境配慮指針】

- 大規模な自然改変を伴う開発は極力避け、自然を残すことにより生態系保全や緑化施工等、全環境保全に配慮した計画
- 河川や池、地下水の水質保全に配慮した計画
- 周辺景観との調和に配慮した計画
- 文化財等の保全に配慮した計画
- 環境負荷の少ない工法、材料を採用
- 事前に地元の関係住民に計画内容を説明し、意見を反映

(3) 嬉野町中心商店街地区市街地総合再生計画

【計画策定の趣旨】

嬉野町の中心部における市街地構造の再整備と、居住環境の改善、商業・観光機能の活性化に向けた施策・事業を体系的に整理した計画。

【まちづくりの目標】

住民が誇れる街・住んでみたいと思う街・また来てみたいと思える街

【整備構想】

- | | |
|-----------------------------|-----------------------|
| ■情緒ある「湯の街」の環境整備 | ■「中心商店街地区再生ゾーン」の活性化 |
| ■街の中心「シンボルゾーン」の整備と周辺ミニ拠点の整備 | |
| ■「幹線道路沿道ゾーン」の環境・景観整備 | ■街区への「導入街路周辺ゾーン」の環境整備 |
| ■都心「居住ゾーン」の環境整備 | ■公共施設の整備 |
| ■地域防災上の整備 | ■「地域交流拠点ゾーン」の整備 |
| ■既存の地域資源の保全・再生・活用 | ■まちなみ景観の形成 |
| ■うれしのらしさの確立 | ■地域コミュニティの形成 |
| ■まちづくりソフト事業の同時展開 | |

(4) 嬉野市塩田津伝統的建造物群保存地区保存計画

【計画策定の趣旨】

長崎街道の宿場町や塩田川の湊町として栄え、商家が建ち並んだ塩田津の歴史的町並みの保全・回復に向け、国の重要伝統的建造物群保存地区の選定に合わせ、伝統的な建物の構造・意匠や地区の構造的特徴を把握し、保存対象建造物等と、その保存整備に取り組む。

【計画概要】

名称：嬉野市塩田津伝統的建造物群保存地区

面積：約 12.8ha

区域：嬉野市塩田町大字馬場下甲の一部

方針：塩田津の景観を特徴付けている伝統的建造物群を構成する建造物、及びこれと一体を成してその価値を形成している環境要素の保存。また、伝統的建造物群を構成する建造物以外の建築物の修景等による保存地区の特性を活かした生活環境の整備。

※以後、重要伝統的建造物群保存地区を「伝建地区」と略す。

3. 主要プロジェクト

(1) 九州新幹線西九州ルート建設、並びに嬉野温泉駅周辺整備

■九州新幹線西九州ルート建設

博多駅～長崎駅の区間で営業運転を目指す九州新幹線西九州ルートは、長崎本線や佐世保線の一部を活用したフリーゲージトレイン方式で計画しており、博多駅で山陽新幹線に直結することで、観光をはじめ経済・文化などあらゆる分野における交流機会の拡大に寄与するものと期待されている。

■嬉野温泉駅周辺整備

九州新幹線と嬉野温泉駅の開業効果を最大限に発揮し、魅力あるまちづくりを進めるために、嬉野温泉駅周辺については、“人・もの・情報がふれあう『もてなし交流拠点』”をテーマとし、人の流れを誘導するとともに、観光や交通などの地域情報を発信する嬉野市の広域的な玄関口としてのまちづくりを推進する。

【期待される効果】

- 観光交流（誘客）エリアの拡大
- 企業誘致と雇用創出（企業流出の阻止）
- あらたなまちづくりの起爆剤（西九州地域の玄関口）



(2) 嬉野市社会文化会館建設、及び塩田中学校改築

■嬉野市社会文化会館の建設

塩田町内に不足している地域の文化・交流機能の強化に向け、多様な交流イベントに利用できるよう体育館と文化ホールを合築した多目的施設を建設する。

■塩田中学校の改築工事

老朽化が進む塩田中学校の建替えに際し、教育システムの変化にフレキシブルに対応するとともに、環境負荷の軽減と快適性を両立し、地域に開かれた学校としての機能更新を行う。

(3) 嬉野医療センター移転構想

【移転構想の概要】

医療技術の進歩に合わせた設備の更新に伴い、定期的に施設の建て替えを必要とする嬉野医療センターについて、佐賀西部地域の広域的な拠点医療機関としての位置づけを踏まえ、次期建て替えに合わせ、広域連携軸が結節する嬉野温泉駅周辺への移転を計画する。

【移転に伴う課題への対応】

- 嬉野温泉駅周辺のまちづくり（嬉野医療センター立地を踏まえた土地利用・交通環境を検討）
- 跡地の土地利用更新（隣接機能や温泉街との近接性を踏まえた広域生活圈機能を検討）
- 嬉野医療センターへのアクセス機能強化（嬉野 I.C.への連絡道路の新規整備を検討）

※広域生活圈機能：本計画では、市域を超え広域化した生活圏のニーズを対象とした都市機能を便宜上「広域生活圈機能」と呼称する。なお、生活圏を超えた県域や地域ブロック（九州全域、北部九州、九州全域など）単位の圏域ニーズを対象とした都市機能は「高次都市機能」と呼称する。

1-3 嬉野市の現況診断

1. 人口構造

- 嬉野市の人口はこの25年間減少傾向にあります。また、世帯数は、近年、僅かながら減少傾向にあり、人口の減少率が大きい結果、世帯人員数は減少しています。
- 用途地域内人口は横ばいで、都市計画区域内用途地域外の人口減少率が大きくなっています。
- 10人中約3人が65歳以上の高齢者という高齢社会を迎えており、さらに人口動態における社会人口の流出超過がつづいていることから、今後、さらに少子高齢化が進むものと予想されます。
- 昼夜間人口比率は塩田町で85%程度と低く、嬉野市全体でみても低下が進行しています。その要因となる就業・通学における流出入人口をみると、隣接する武雄市や鹿島市を中心に大きく流出超過となっています。
- 産業別就業人口では第3次産業人口が最も多く、現在も増加傾向にありますが、その一方で、第2次産業人口は平成7年をピークに約3割も減少しています。

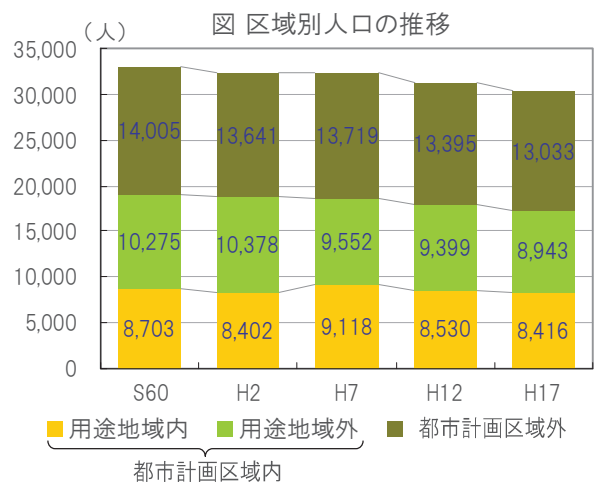
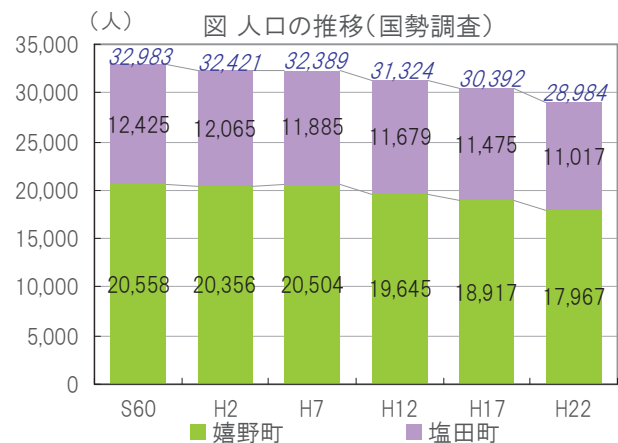
(1) 人口

嬉野市の総人口は、平成22年の国勢調査時点において28,984人で、佐賀県内20市町中9位の規模を有しており、昭和60年をピークに減少傾向にあります。

嬉野市は平成18年に合併しており、人口の推移を旧町（嬉野町、塩田町）別にみると、塩田町では比較的早い時点から人口の減少が進んでいましたが、近年では、平成7年以降に減少に転じた嬉野町の減少率が大きくなっています。

また、都市計画区域内外及び、用途地域内外の人口の推移をみると、すべての区域・地域で減少傾向にあるものの、用途地域については減少幅が小さく、都市計画区域内用途地域外の区域が最も減少率が大きくなっています。割合は都市計画区域外が最も多いものの、経年的には用途地域内の人口割合が増加しています。

※旧嬉野町で用途地域を指定して以降、現在まで都市計画区域、用途地域の面積に変更はありません。

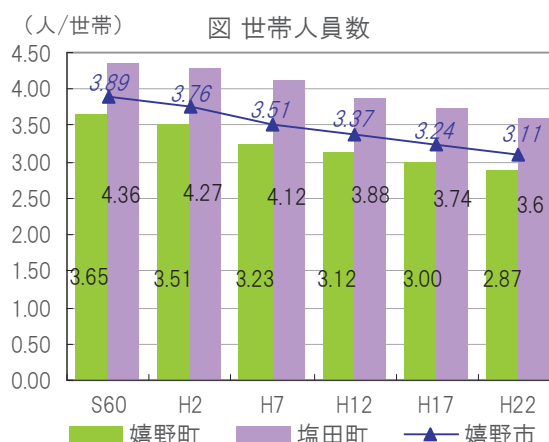
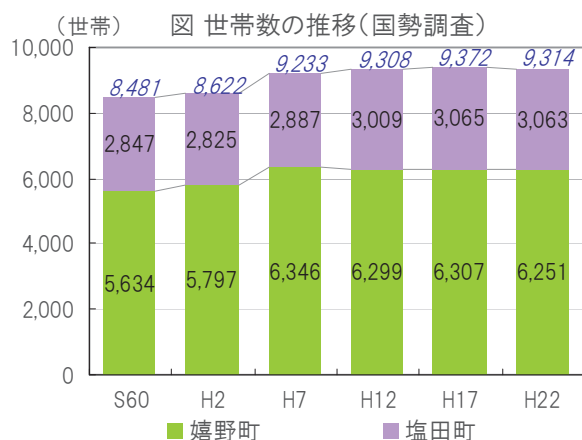


(2) 世帯数・世帯人員

平成22年現在（国勢調査時点）の嬉野市の世帯数は9,314世帯で、昭和60年以降の25年間で約1割程度増加していますが、平成7年からの15年間は、ほぼ横ばいの状態にあります。

また、嬉野町では平成7年をピークに約100世帯減少しており、塩田町も平成17年から平成22年にかけて僅かながら減少に転じています。

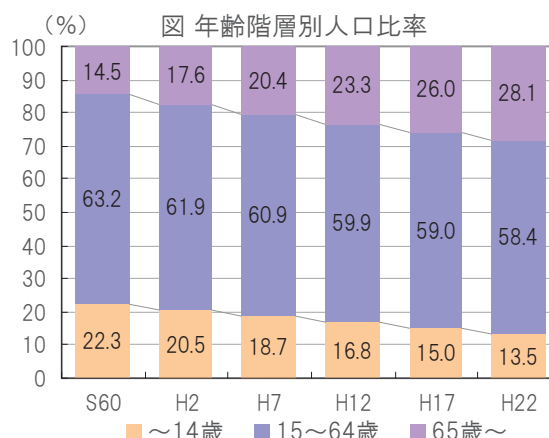
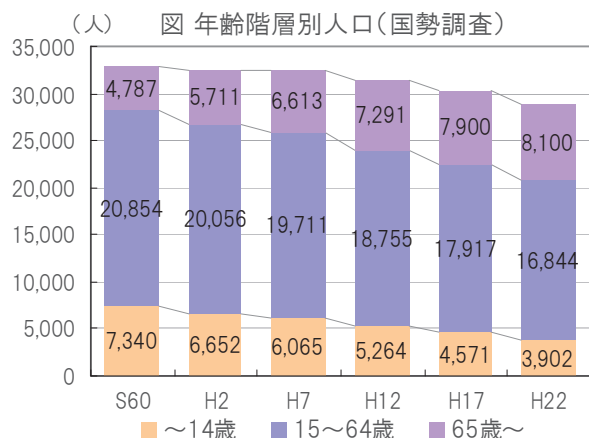
一方、一世帯あたりの人員数については、この25年間に人口が減少を続ける中、世帯数が緩やかながら増加してきたことから、昭和60年の約3.9人から平成22年には約3.1人と大きく減少しています。



(3) 年齢階層別人口

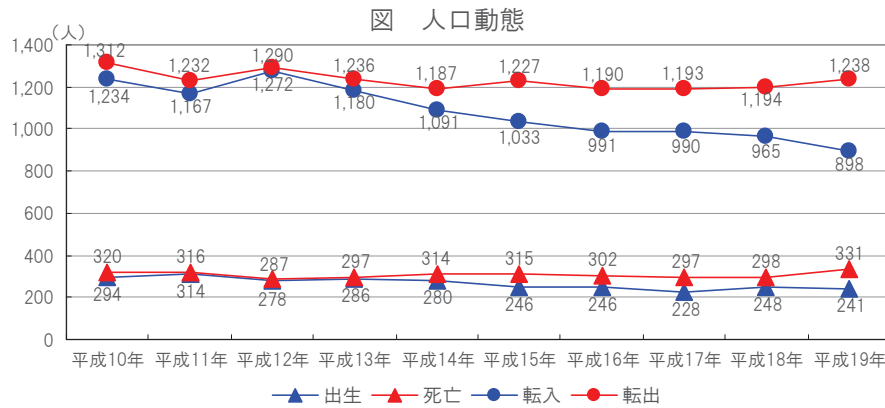
平成22年国勢調査時点の年齢階層別人口をみると、年少人口（14歳以下）が3,902人、生産年齢人口（15歳以上65歳未満）が16,844人、老年人口（65歳以上）が8,100人となっています。

昭和60年以降における年齢階層別人口とその構成比率の推移をみると、年少人口と生産年齢人口は減少傾向にあり、老年人口のみが増加しており、平成2年から同7年にかけて老年人口が年少人口を逆転するなど、少子高齢化の傾向が続いています。



(4) 人口動態

嬉野市の人口は、社会増減（転入・転出）、自然増減（出生・死亡）ともに流出超過傾向がつづいており、特に近年は社会減の幅が大きくなっています。

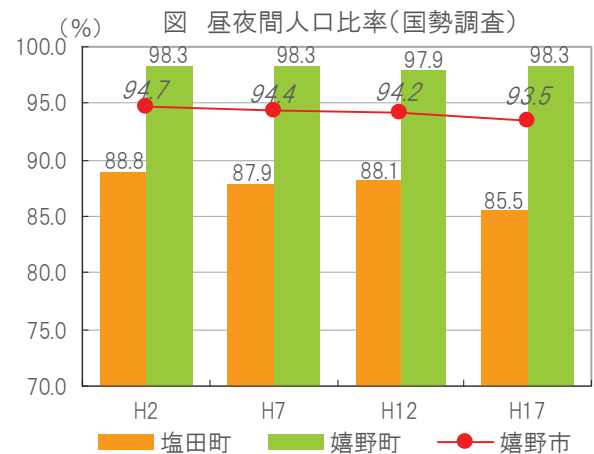


(資料：市民税務課)

(5) 昼夜間人口比率

平成17年国勢調査に基づく嬉野市の昼夜間人口比率は93.5（昼間人口÷常住人口）で、就業・通学等による他都市への流出超過となっています。特に塩田町の比率が85.5と低く、嬉野町の98.3を大きく下回っています。

また、経年的にみると、昼夜間人口比率はわずかながら低下傾向にあります。

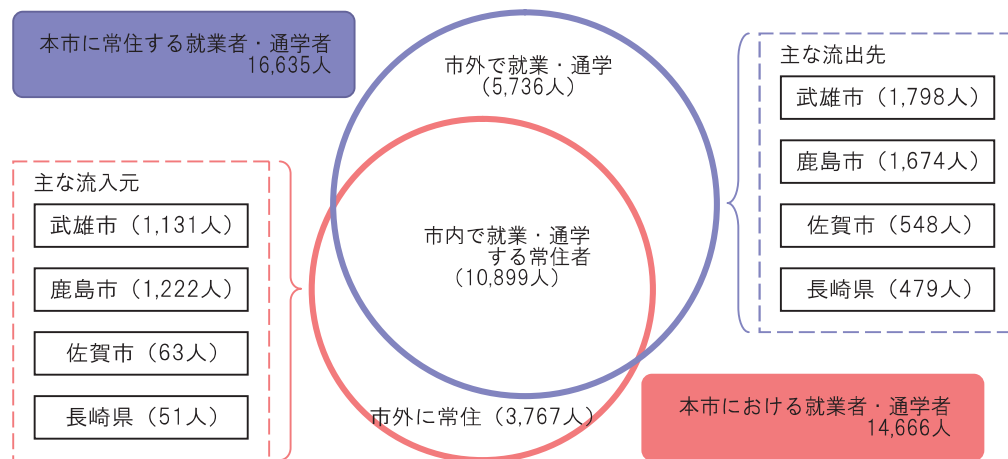


(6) 流出人口

平成17年国勢調査に基づく嬉野市に常住する就業・通学者数は16,635人で、従業・通学地の内訳をみると、市内での就業・通学者数は10,899人、市外に流出する就業・通学者数は5,736人で、流出率は34.5%に達しています。特に隣接する武雄市、鹿島市や、佐賀市、長崎県などへの流出が目立ちます。一方、同年における嬉野市の就業・就学者数は14,666人で、そのうち市外から流入する就業・通学者数は3,767人で市内就業・通学者数の約4分の1を占めます。また、主な流入元は流出先と同じく鹿島市や武雄市となっています。

その結果、嬉野市は1,969人の流出超過（平成17年時点）となっており、その主な要因として、流出入の関係が強い武雄市や鹿島市に対し大きく流出超過となっている点と、就業・通学に関する佐賀市や長崎県への一方的な依存が挙げられます。

図 流出人口

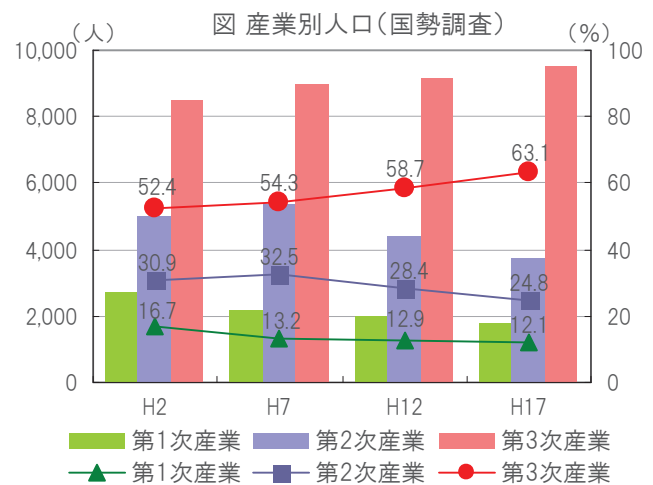


(資料: 平成17年国勢調査)

(7) 産業別就業人口

嬉野市の産業別就業人口構成は、平成17年国勢調査時点で第1次産業人口比率が12.1%、第2次産業人口比率が24.8%、第3次産業人口比率が63.1%となっています。

経年的にみると、第3次産業のみが増加をつづけており、第1次産業と第2次産業は就業人口を減らしています。特に近年の動向をみると、最も就業人口の少ない第1次産業の減少傾向が鈍化していますが、第2次産業の就業人口については、ここ20年間のピークである平成7年から3割も減少しています。



※人口比率は分類不詳を除外して計算

2. 産業構造

- 嬉野市は、収穫量、算出額ともに全国有数のお茶の生産地です。
- 経営農家数・耕地面積から塩田町と嬉野町における経営規模の差異が見られます。
- 嬉野市は事業所数、従業者数、製造品出荷額等、粗付加価値額のどの指標も規模は小さく、佐賀県内でも工業機能の集積が少ない都市となっています。
- 商業は小売業の比率が高い特徴がありますが、その事業所数、従業者数、商品販売額すべて規模は小さく、市外への消費の流出が懸念されます。
- 県内最大の温泉地を有する嬉野市は、観光入り込み客数は県内他市に比べ多くないものの、宿泊客数は佐賀県内随一の規模を有しています。

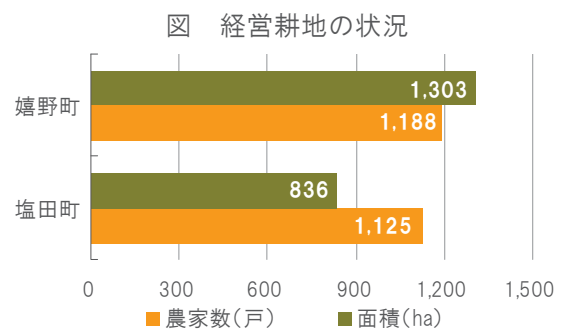
(1) 農業

嬉野市の農業の特徴を、農業生産品目別の作付面積をみると、水稻（水田）の992haが最も多く、次いで工芸農作物（茶畑）の649haとなっています。一方、収穫量については、5,780tの生葉収穫量がある茶が米よりも多く、「うれしの茶」として産地ブランドを確立した主力農産物となっています（農林業センサス2005より）。

特に、本市は玉緑茶の国内生産量25%を占める全国有数の産地であり、農林水産省「平成18年生産農業所得統計」をみると、茶を主とする工芸農作物の産出額は10億1千万円に達します。

また、旧町別に経営耕地の状況を見ると、農家数は塩田町、嬉野町ほぼ同数であるのに対し、耕地面積は3:2の比率で嬉野町が多くなっています（農林業センサス2005より）。

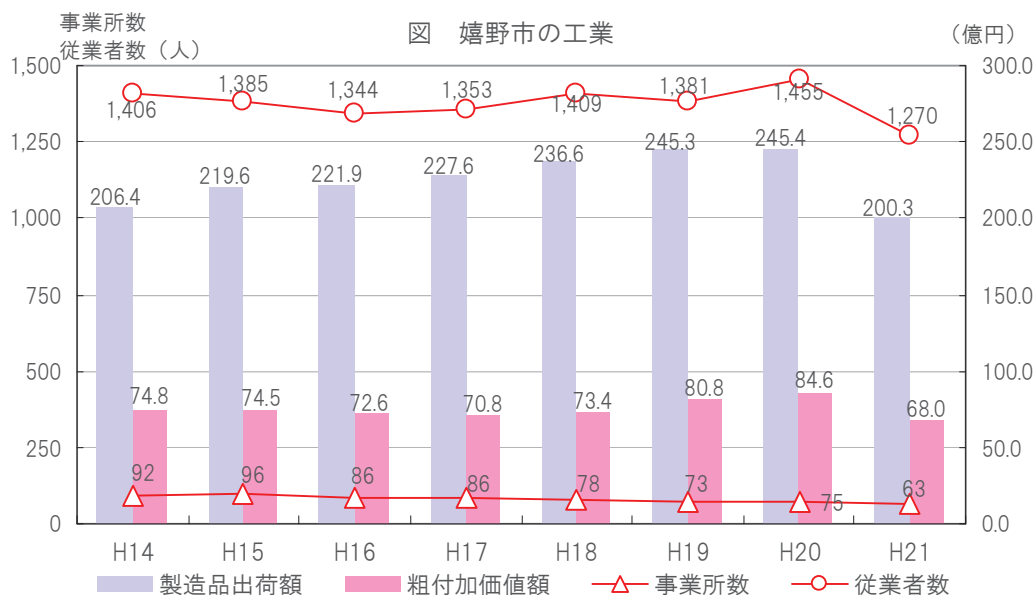
この結果から、就労としての農業の比率は塩田町の方が大きいものの、産業としては耕作規模、出荷額ともに大きい嬉野町の方が盛んであることが分かります。



(2) 工業

平成21年の工業統計調査では、嬉野市の事業所数は63、従業者数は1,270人、製造品出荷額等は約200.3億円、粗付加価値額は約68億円となっています。

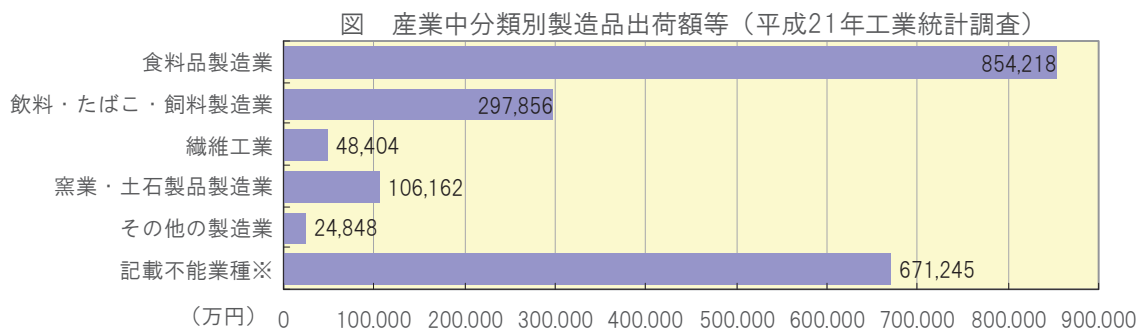
平成14年からの経年変化をみると、製造品出荷額等と粗付加価値額は景気の影響を受けながら増減を繰り返していますが、事業所数と従業者数は減少傾向にあり、特に平成20年から平成21年にかけての減少幅が大きくなっています。



資料：工業統計調査（経済産業省）

〈産業中分類別規模〉

産業中分類別の製造品出荷額等をみると、平成21年時点でもっとも出荷額規模が大きい業種は食料品製造業で、全体の4割強を占める854,218万円の規模を有しており、飲料・たばこ・飼料製造業の297,856万円がこれに続きます。



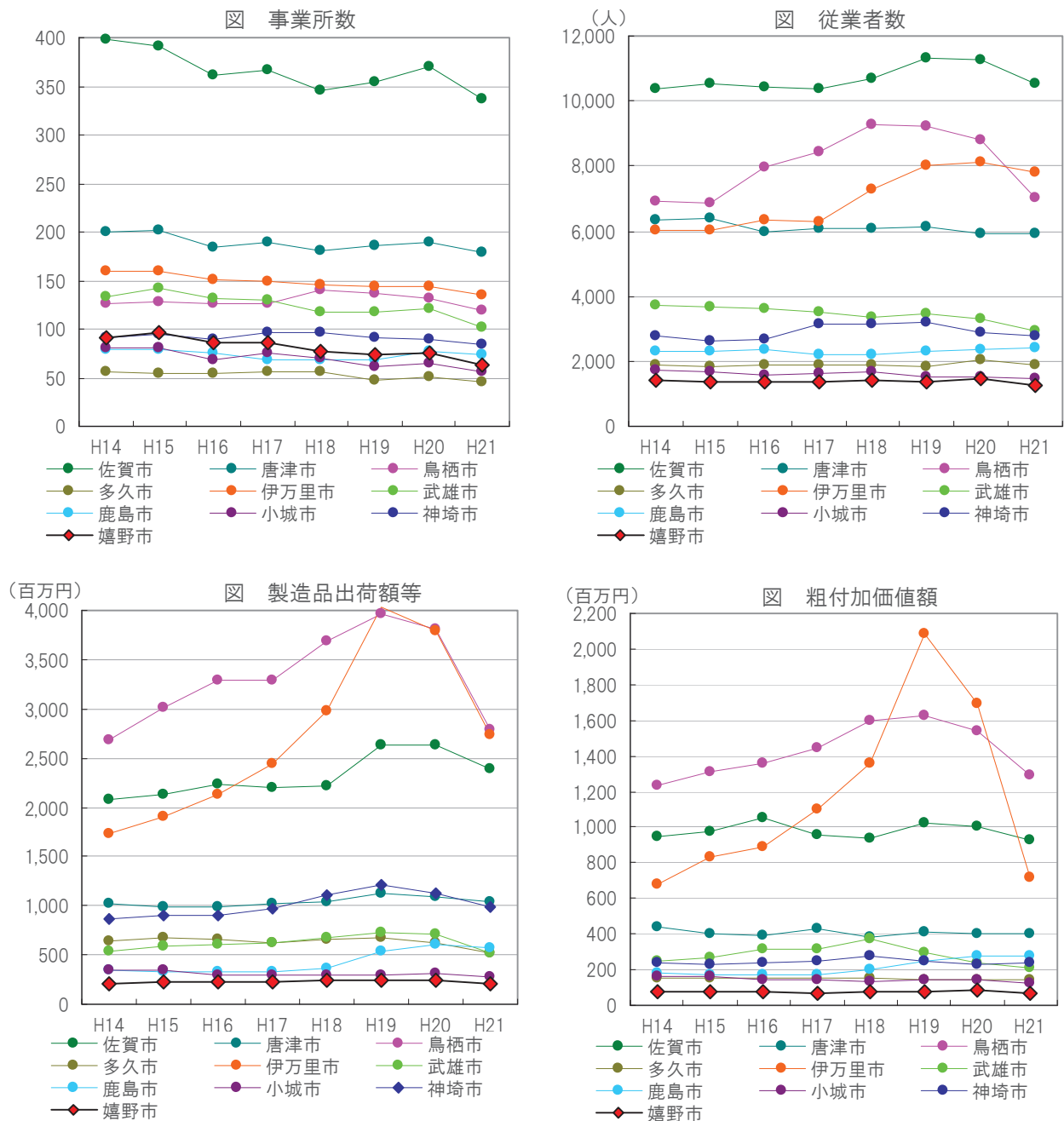
記載不能業種 木材・木製品製造業（家具を除く）、家具・装備品製造業、プラスチック製品製造業、ゴム製品製造業、金属製品製造業、一般機械器具製造業、輸送用機械器具製造業

〈工業機能集積〉

嬉野市の工業規模を県内10都市※で比較すると、事業所の立地数が8位であるほかは、全ての指標で最下位となっており、工業規模の小さい都市であるといえます。

また、塩田町時代に久間工業団地（団地面積10.4ha/工業用地面積8.7ha）を整備するなど、これまでも企業誘致を進めてきましたが、他都市に比べ立地件数は多くありません。

※県内10都市：本計画策定時（平成24年）に市制を敷いている佐賀市、唐津市、鳥栖市、多久市、伊万里市、武雄市、鹿島市、小城市、神崎市、本市の佐賀県内10市



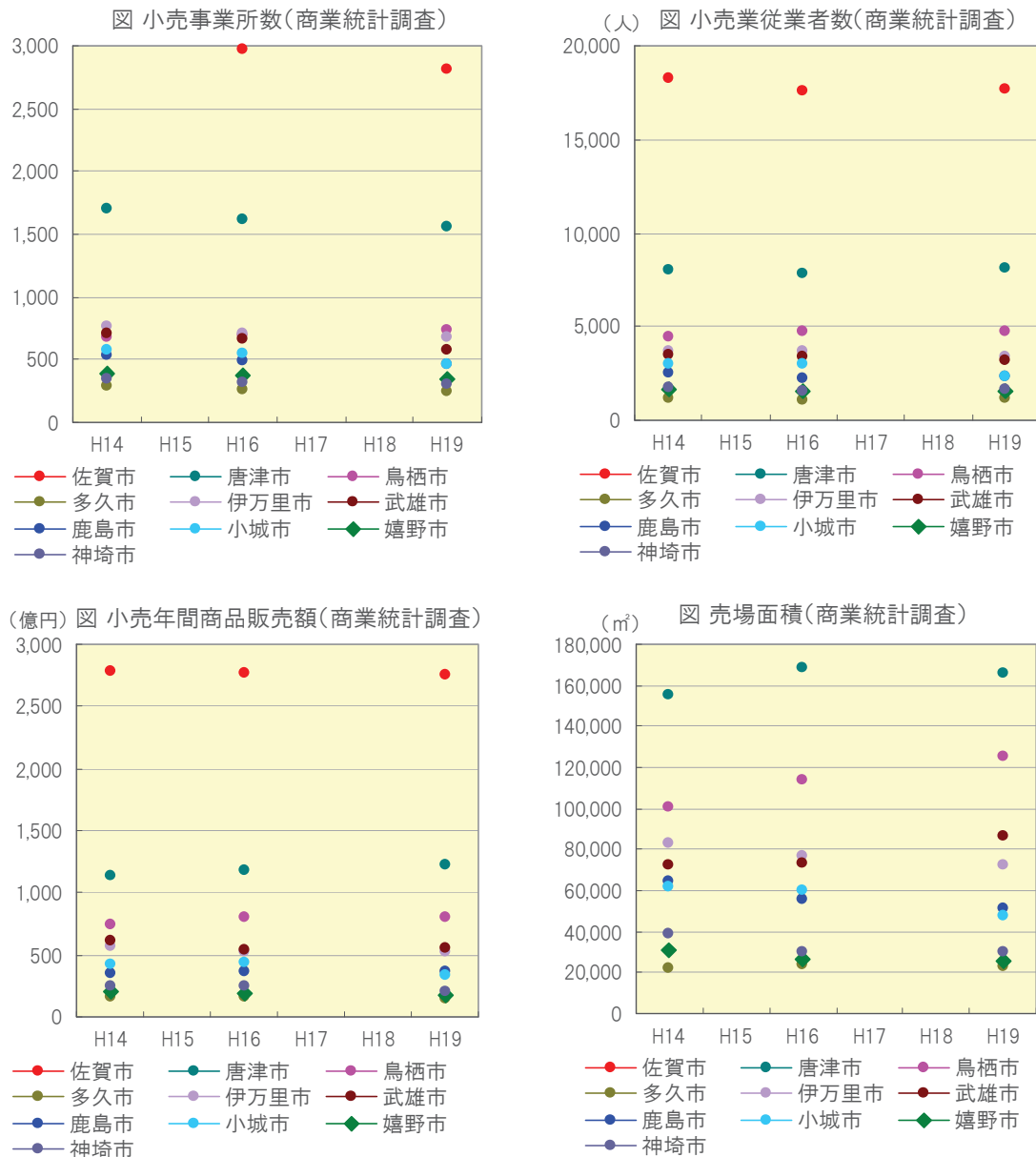
資料：工業統計調査（経済産業省）

(3) 商業

〈商業機能集積〉

最新の商業統計調査（平成19年調査）をみると、嬉野市の小売業は事業所数が350、従業員数が1,550人、年間商品販売額が179億円、売場面積が25,637㎡で、県内10市で比較すると、事業所の立地数が8位、従業者数、年間商品販売額、売場面積がそれぞれ9位の規模であり、商業機能の小さい都市であることを示しています。

また、平成14年以降の商業統計の推移をみると、すべての指標が減少傾向を示しています。

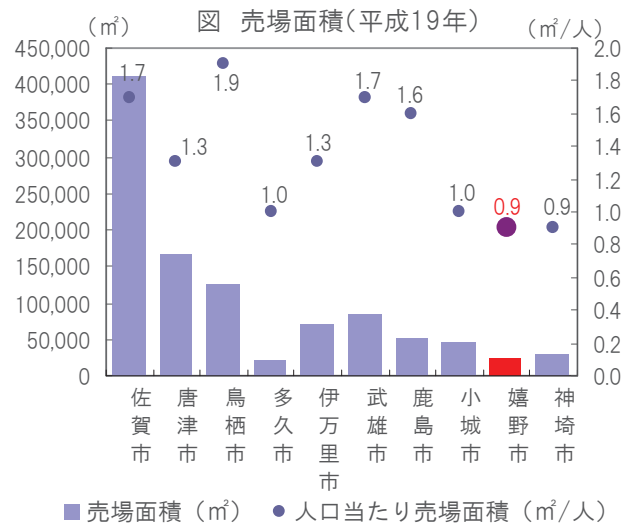


資料：商業統計調査（経済産業省）

〈小売業売場面積〉

平成19年時点の人口1人当たり売場面積は、隣接する武雄市や鹿島市に比べ極端に小さく1㎡/人にも満たない状況にあります。

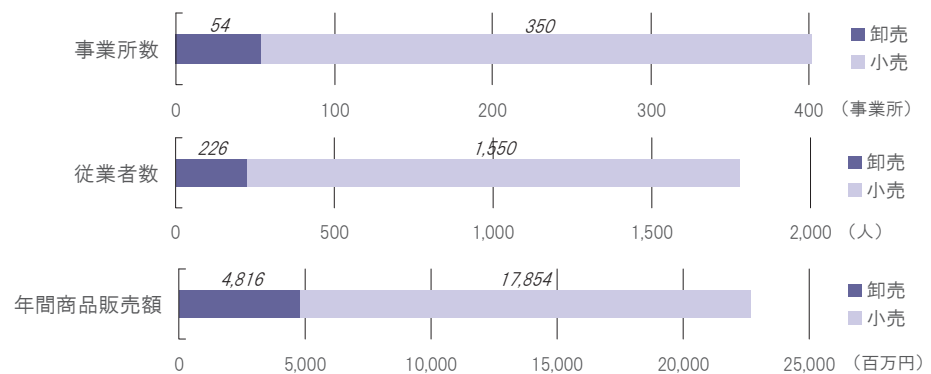
近年は市内においても土地区画整理事業地区で商業施設の立地が進んでいますが、その一方で、武雄市には1万5千㎡規模、鹿島市には7千㎡規模のショッピングセンターをはじめ大型商業施設が立地しており、施設面において集客力が弱い状況にあります。



資料：商業統計調査（経済産業省）

〈小売・卸売比重〉

また、嬉野市の商業の特徴としては、小売業の比率が高い点が挙げられます。平成19年調査における年間商品販売額における小売販売額比率（小売年間商品販売額÷総年間商品販売額）をみると、県内10市の平均が42.9%であるのに対し、本市は78.8%と10市中最も高く、2位の鹿島市（同68.2%）を大きく引き離し突出しています。



資料：商業統計調査（経済産業省）

(4) 観光

〈観光客数〉

嬉野市の主な観光資源は温泉で、源泉数、利用許可施設数ともに佐賀県内の約3割を占めており、県内最大の温泉地を形成していますが、温泉（宿泊）以外の集客力が不足している状況にあります。

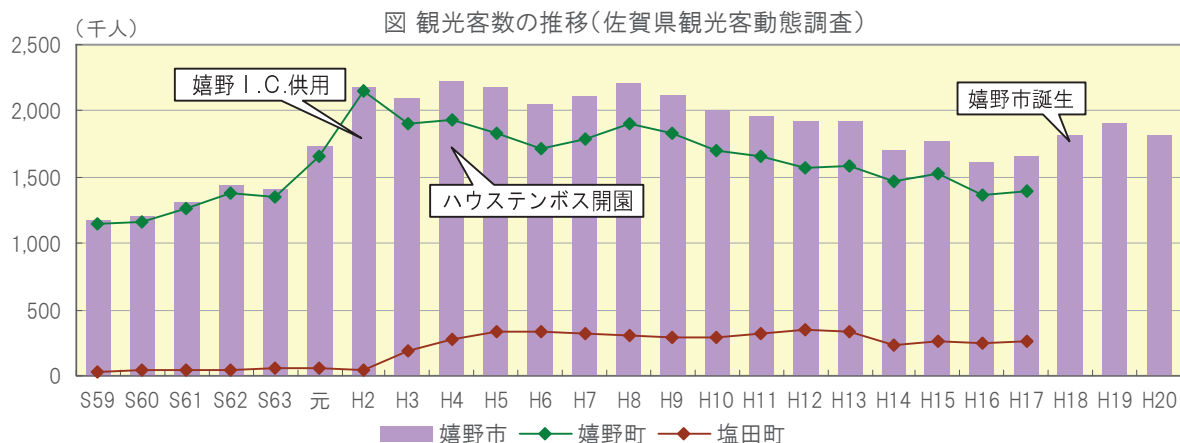
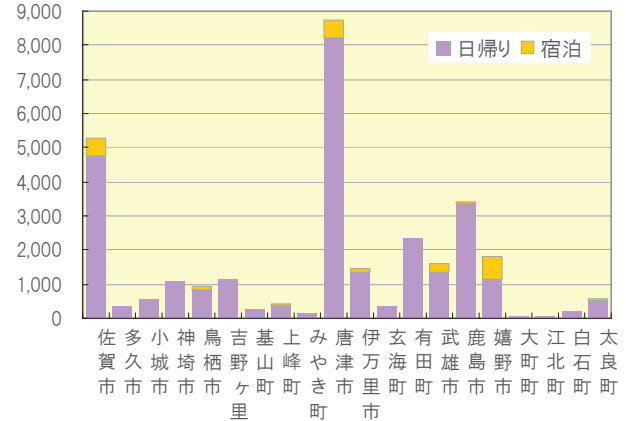
その結果、本市の観光客数181万人（平成20年／佐賀県観光動態調査）の内訳を宿泊の有無でみると、宿泊客数は65万人で県内20市町中1位の規模であるのに対し、日帰り客数では116万人と県内7位で、隣接する鹿島市の半分以下の規模となっており、総数でも県内5位の規模となっています。

宿泊客が多い最大の要因は嬉野温泉における宿泊施設の集積と温泉という集客資源であり、嬉野の市街地は一年を通じて住民以外に多くの来街者が滞在する状態にあるといえます。

ここ四半世紀の経年変化をみると、嬉野市（塩田町、嬉野町）を訪れる観光客数は、長崎自動車道嬉野I.C.（インターチェンジ）の供用を開始した平成2年頃に急増して以降、ハウステンボスが開園した平成4年、及び同8年をピークに年々減少していましたが、平成16年を底として、再び増加傾向に転じています。平成16年は九州新幹線（鹿児島ルート）の一部区間が開業しており、さらに、日本政府が訪日外国人旅行者数の拡大（平成22年に1,000万人）に向け、ビジット・ジャパン・キャンペーンを開始した年でもあります。

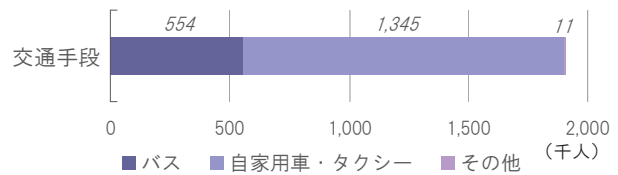
しかしながら、平成19年をピークに本市の観光客数は再び減少に転じており、さらに同年後半に起きた世界的な金融危機によって、我が国を訪れる外国人観光客が大幅に減少するなど、近年における観光を取り巻く環境は国内外ともに低迷した状況にあります。

（千人） 図 佐賀県内宿泊・日帰り別観光客数（平成20年）



〈交通手段別観光客数〉

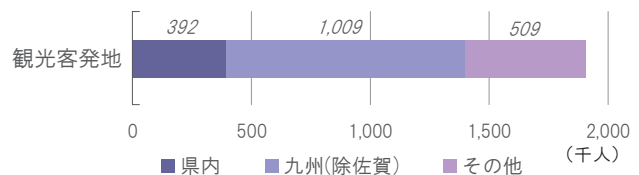
平成19年に嬉野市に訪れた観光客の交通手段は、自家用車及びタクシー利用が約7割の1,345万人、バス利用が約3割の554万人となっています。



(資料：佐賀県観光客動態調査)

〈発地別観光客数〉

訪れる観光客の発地をみると、佐賀県を除く九州圏内が100.9万人で全体の約53%を占め、次いで九州圏外の50.9万人（同約27%）となっており、佐賀県内からの来客は約20%の39.2万人にとどまっています。



(資料：佐賀県観光客動態調査)

〈観光集客機能〉

嬉野温泉は現在約40のホテル・旅館が稼働しており、総客室数1,050室程度で約4,500人の収容人員数を誇ります。その結果、嬉野市の観光機能は、他市に比べ宿泊の比重が高くなっていますが、観光・旅行スタイルの変化や国際化などの時代に対応するため、温泉街の再生や特産物の活用など観光の多様化に取り組んでいます。

また、塩田町の区域内にも国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された古い町並みや、地場産業の窯業や酒造業といった歴史性・地域性を有した産業文化財など、集客が期待できる観光資源が多くみられます。

観光振興体制をみると、(社)嬉野温泉観光協会の企画・運営による嬉野温泉の各種観光事業に偏っており、現時点において嬉野温泉と市内の観光資源との連携は十分といえない状況にあります。

一方、現在、九州新幹線西九州ルート建設と嬉野温泉駅の設置が進められており、新たな集客インフラの整備による観光客数の増加が期待されています。



3. 土地・建物利用

- 嬉野市は市域面積の約 2 / 3 を山林が占めています。
- 温泉街を核とする市街地が形成されています。
- 都市計画区域は市域面積の約 1 / 3 の規模で、全域が嬉野町内に指定されています。
- 市域の 9 割強の区域を農業振興地域に指定しています。
- 市街地に隣接して地すべり発生危険区域が指定されています。
- 面積比率で 4 割強の建物が都市計画区域外に立地しています。

(1) 土地利用状況

嬉野市の市域は約 2 / 3 を山林（約7,804ha）が占め、その残りの約 2 / 3 も田畑（約3,018ha）などの農地に利用されており、住・商・工業用地などの宅地や道路用地、公共・公益用地といった都市的土地利用面積は約1,420haで、市域の 1 / 8 未満にとどまっています。

都市的土地利用は、嬉野温泉の市街地として一団の区域として形成されているほか、塩田庁舎周辺部や農地が広がる平野部などでも主要道路沿いや河川沿いに点在しています。

図 土地利用現況

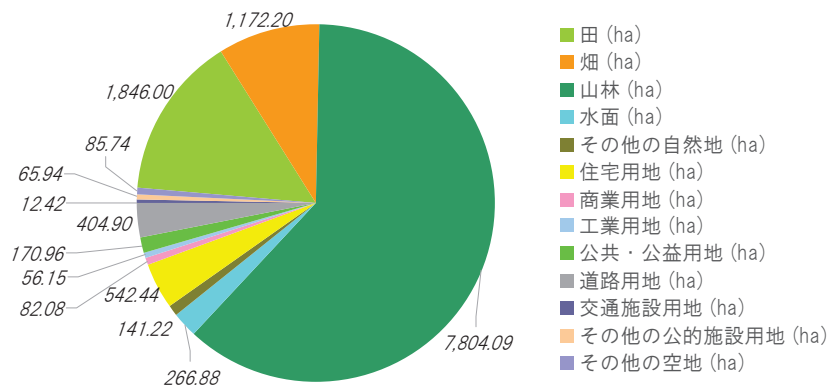
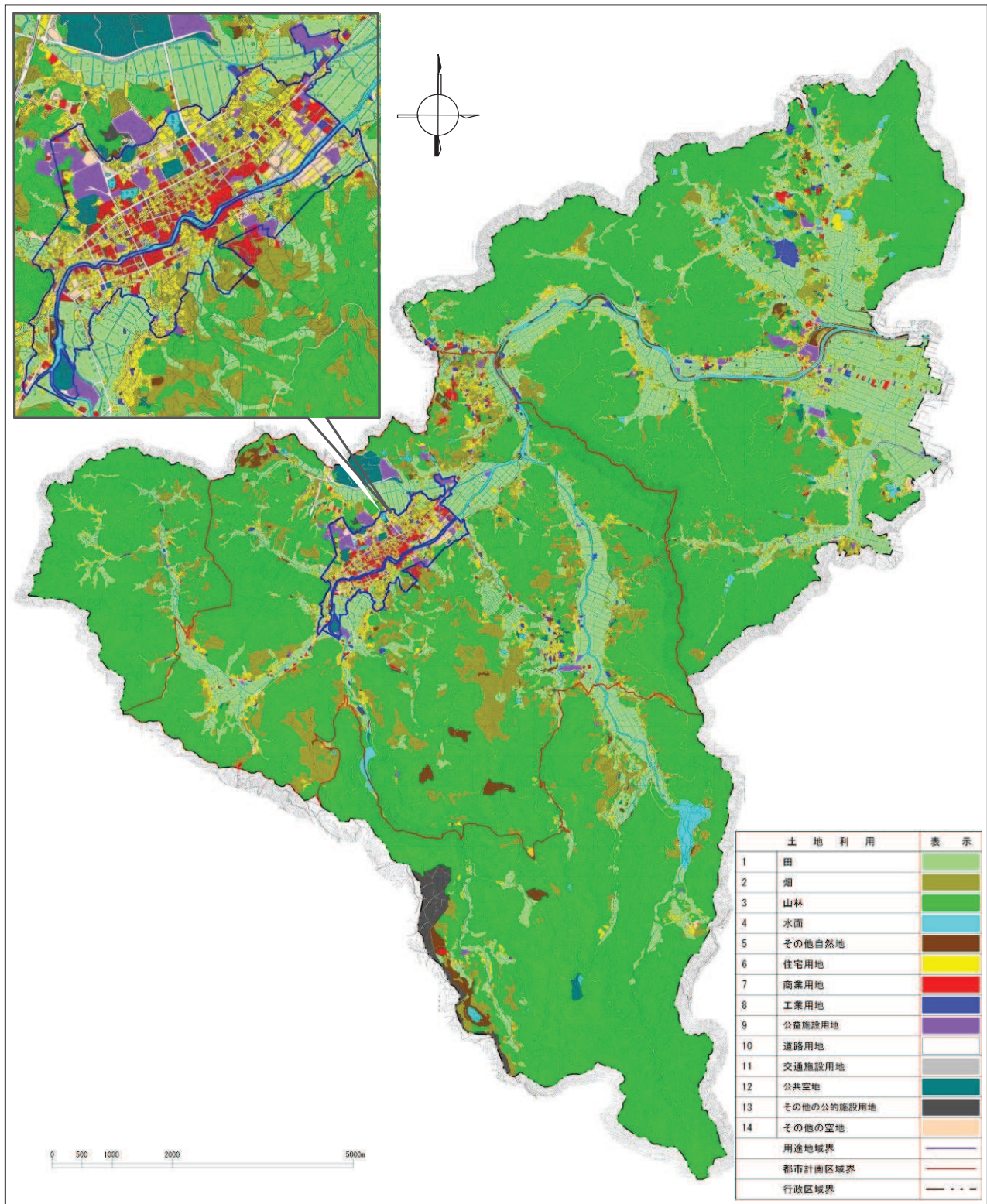


図 土地利用現況



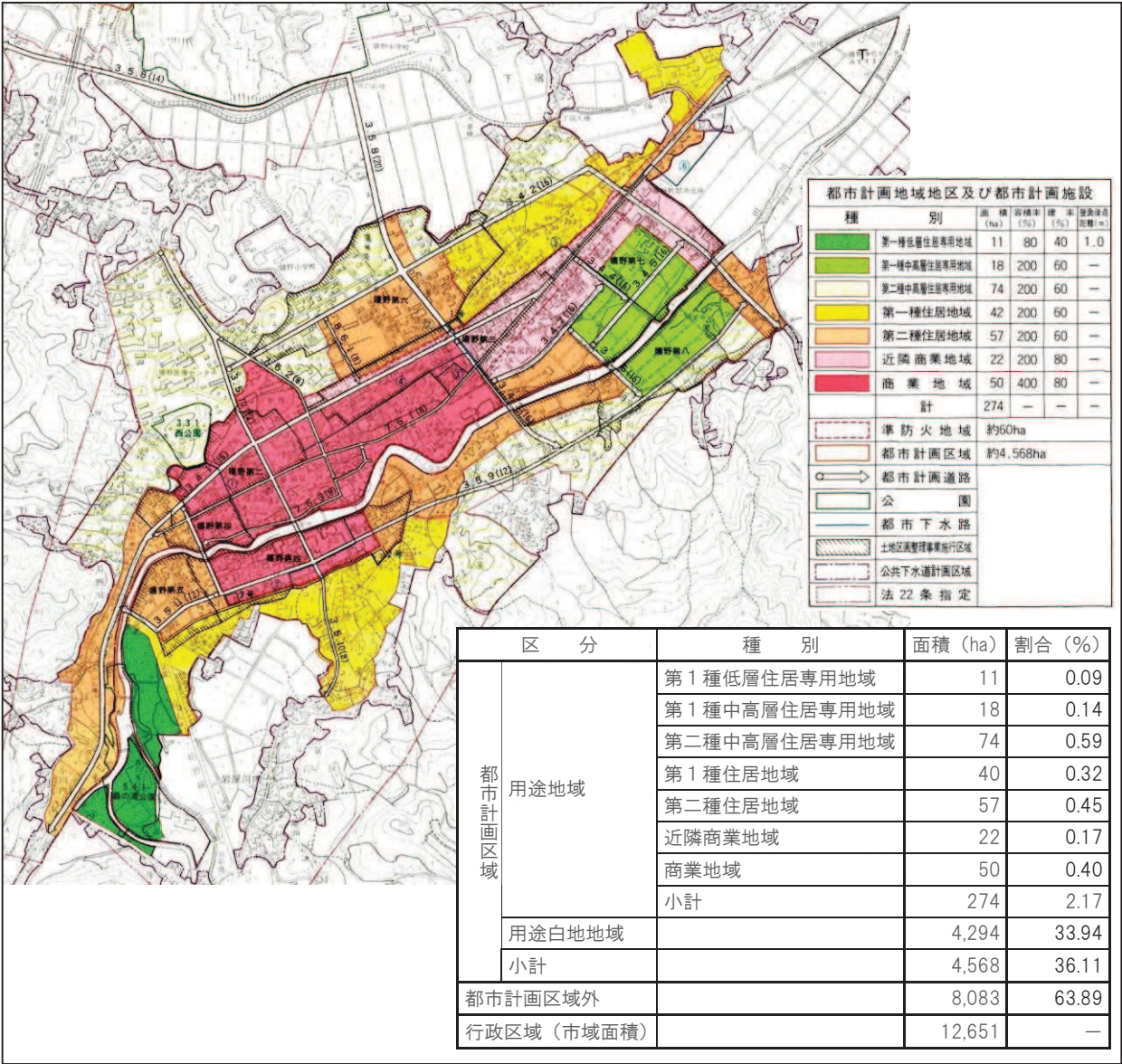
(2) 法適用状況

嬉野市の土地利用に関する法規制として、現在、「都市計画法」に基づく都市計画区域と、「農業振興地域の整備に関する法律」に基づく農業振興地域（農用地）、「森林法」に基づく地域森林計画対象民有林及び保安林、並びに、急傾斜地崩壊危険区域、土石流危険区域、地すべり発生危険区域などが指定されています。

本市の行政区域（市域）は12,651haですが、その約3分の1にあたる4,568haを都市計画区域に定めています。現在の都市計画区域は全域が嬉野町の地域に指定されており、その内、用途地域を指定している区域は274haのみで、市域全体の2%程度にとどまっています。

また、用途地域の地域区分をみると、温泉旅館が立ち並ぶ市街地の中心部に商業系用途地域72haが指定され、住居系用途地域202haがそれを取り囲むように配置されています。

図 用途地域



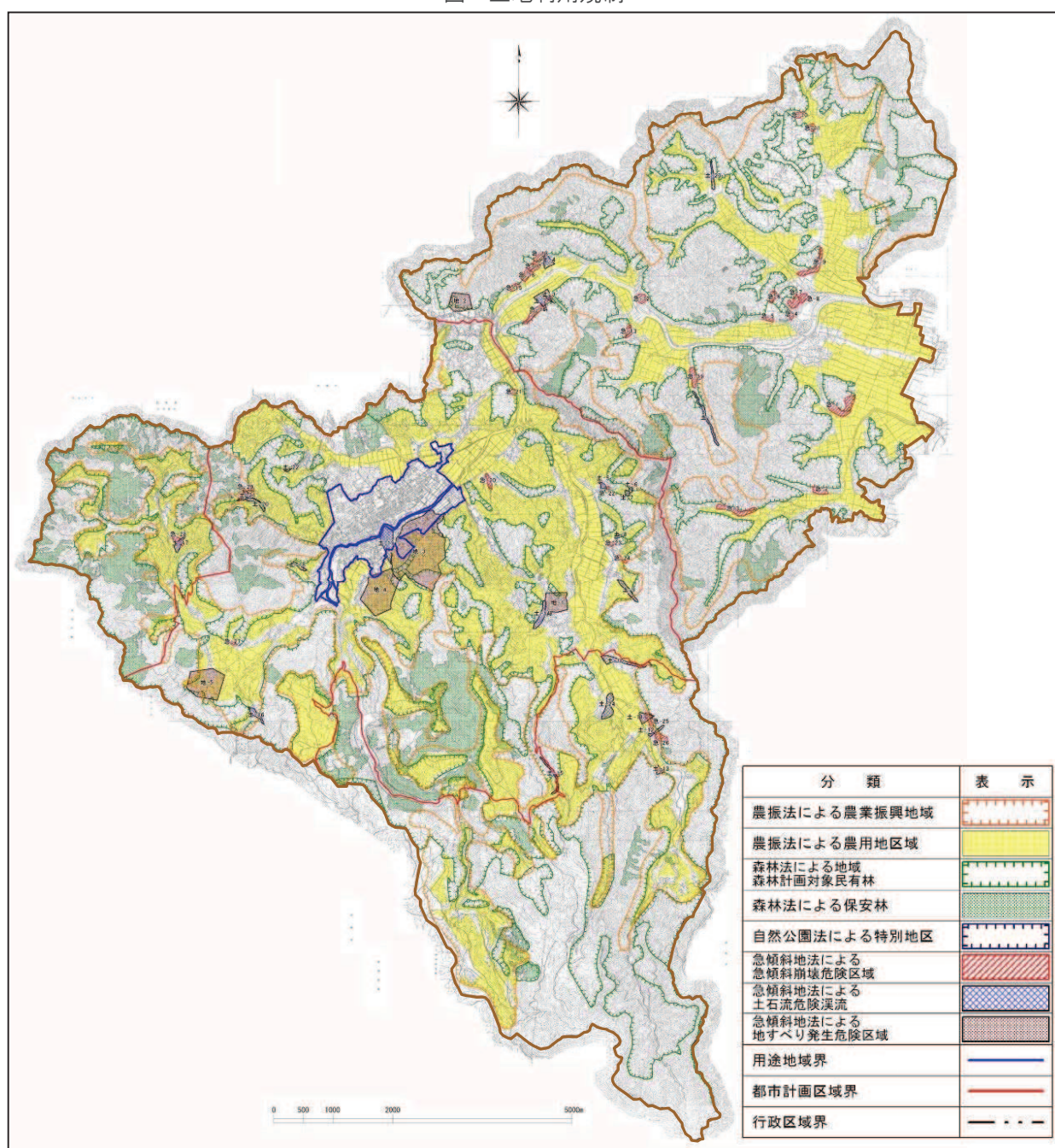
都市計画以外の法適用では、農業振興地域が2,944ha指定されており、そのうち2,295haが農用地区域となっています。また、地域森林計画対象民有林6,508ha、保安林1,132haなどが重複指定されています。

さらに、嬉野温泉市街地の塩田川右岸側の一部など、主に嬉野町において地すべり発生危険区域が指定されているほか、塩田町では塩田川沿いに急傾斜地崩壊危険区域が点在しています。

(土地利用関連法適用状況)

適用法	面積 (ha)	市域占有率 (%)
準防火地域	59.8	0.5
農業振興地域	2,944	23.3
農用地	2,295	18.1
地域森林計画対象民有林	6,508	51.4
保安林	1,132	8.9
急傾斜地崩壊危険区域	63	0.5
土石流危険区域	56	0.4
地すべり発生危険区域	163	1.3

図 土地利用規制

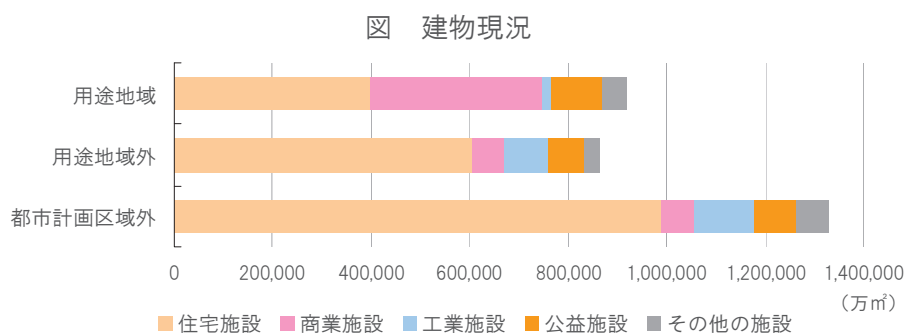


(3) 建物利用状況

嬉野市内の建物利用状況について、平成20年度に実施した都市計画基礎調査の結果をみると、市域全域では建物延べ床面積が約311万㎡あり、その内訳をみると、約3分の2を住宅施設が占めています。また、住宅施設以外では、商業施設が約48万㎡と最も多く、工業施設が約23万㎡、公益施設が約26万㎡、その他の施設が約15万㎡となっています。

これら建物の分布状況を都市計画区域の内外で分けると、都市計画区域内の約178万㎡、都市計画区域外の約133万㎡となり、さらに都市計画区域について用途地域の内外に分けると、用途地域内に約92万㎡、用途地域外に約86万㎡が分布しています。

このように、本市には都市計画による規制・誘導の対象外となっている、または規制・誘導が緩い建築物が多く見られます。



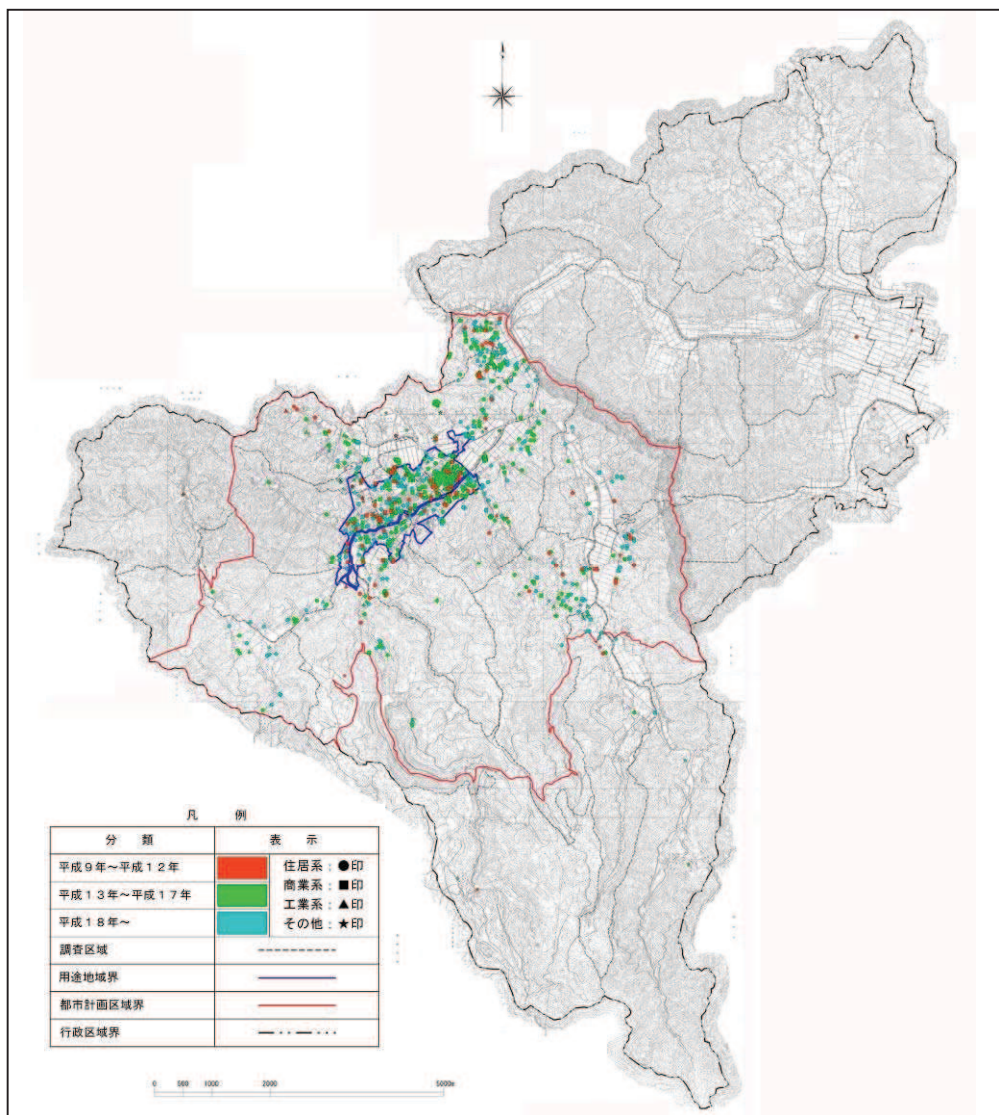
4. 開発動向

- 塩田町の区域を主とする都市計画区域外における建築行為の多くは、確認できない状況にあります。
- 都市計画区域外を中心に農地転用が行われていますが、必ずしも宅地化が進んでいる状況にはありません。
- 開発許可による宅地開発は都市計画区域外を中心に行われています。

(1) 新築着工動向

嬉野市の都市計画区域内では平成9年から同19年にかけて1,013件の建築着工がみられ、これを用途地域の内外に区分すると、地域内が490件、地域外が523件と新築物件の過半数が用途地域外で建てられています。

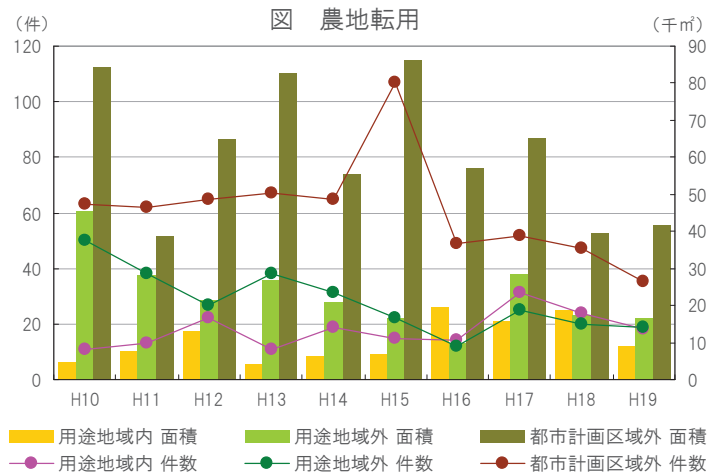
一方、同期間における都市計画区域外の状況については、建築確認申請がなされたもので17件が新築として確認されています。



(2) 農地転用

嬉野市でも農地転用許可制度によって優良農地が保全されてきましたが、その一方で、都市計画区域外を中心に農地転用が行われてきました。

平成10年から平成19年までの10年間に
行われた農地転用は1,072件で、計
95.5haに及んでいます。ただし、転用用
途をみると、用途地域内は住宅用地等が
中心ですが、用途地域外や都市計画区域
外においては、住・商・工用地や公共用
地以外に多く転用されています。これら
の多くは農地から山林(植林)に転用し
ているもので、必ずしも宅地化の進展を
示してはいません。



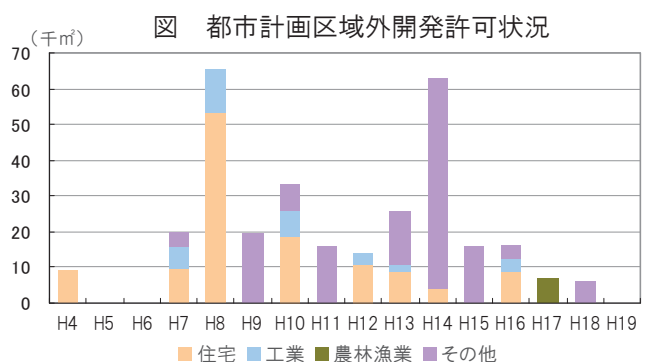
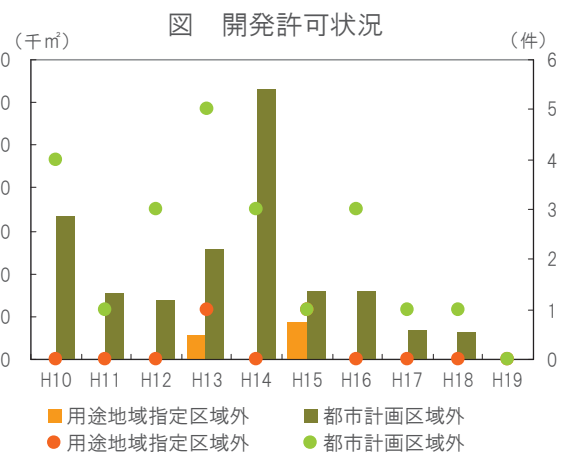
(3) 開発許可

嬉野市では、非線引き都市計画区域と都市計画区域外の基準に基づき開発許可制度が運用されており、市域の各所において開発許可による宅地開発が進められてきました。

平成10年から平成19年までの10年間をみると、用途地域内では開発許可制度は利用されておらず、用途地域外で住宅開発の2件、約1.4ha、都市計画区域外で住宅開発をはじめ、工業やその他の開発などに22件、約19.7haの宅地開発が行われています。

都市計画区域外における開発許可は平成4年より記録されていますが、平成19年までの開発状況を用途別にみると、住居系(計12.3ha)とその他の用途(計14.6ha)が大半を占めています。

また、年次別では平成8年の住居系と平成14年のその他の用途が突出しています。



5. 都市施設・都市基盤整備状況

- 嬉野市では用途地域を指定する嬉野町の中心部において公共団体施行を中心に土地区画整理事業が進められてきました。
- 商店街や温泉旅館が集まる市街地の中心部は、道路幅員が狭く、公園などの公共施設が不足しています。
- 国道498号や(主)鹿島嬉野線など、鹿島市と連絡する国県道の交通量が増加傾向にあります。
- 嬉野市にある都市公園15箇所は嬉野町内に偏って立地していますが、塩田町においては農村公園をはじめ都市公園に含まれない公園が整備されています。
- 都市計画決定された道路や公園の大半は嬉野町の中心部に集中しており、その多くが整備済みとなっています。
- 二級河川塩田川が岩屋川内川や吉田川、八幡川などの支流を集めて市域を東西に貫いています。
- 塩田川はこれまでも河川改修が進められてきましたが、有明海の満潮時と台風などで気圧の低下による高潮の発生や大雨が重なる場合に、流域での氾濫が想定されます。
- 公共下水道は嬉野町の中心部で整備を進めていますが、整備率は3割弱にとどまっています。一方、塩田町では農業集落排水施設の整備が進められています。

(1) 市街地開発事業

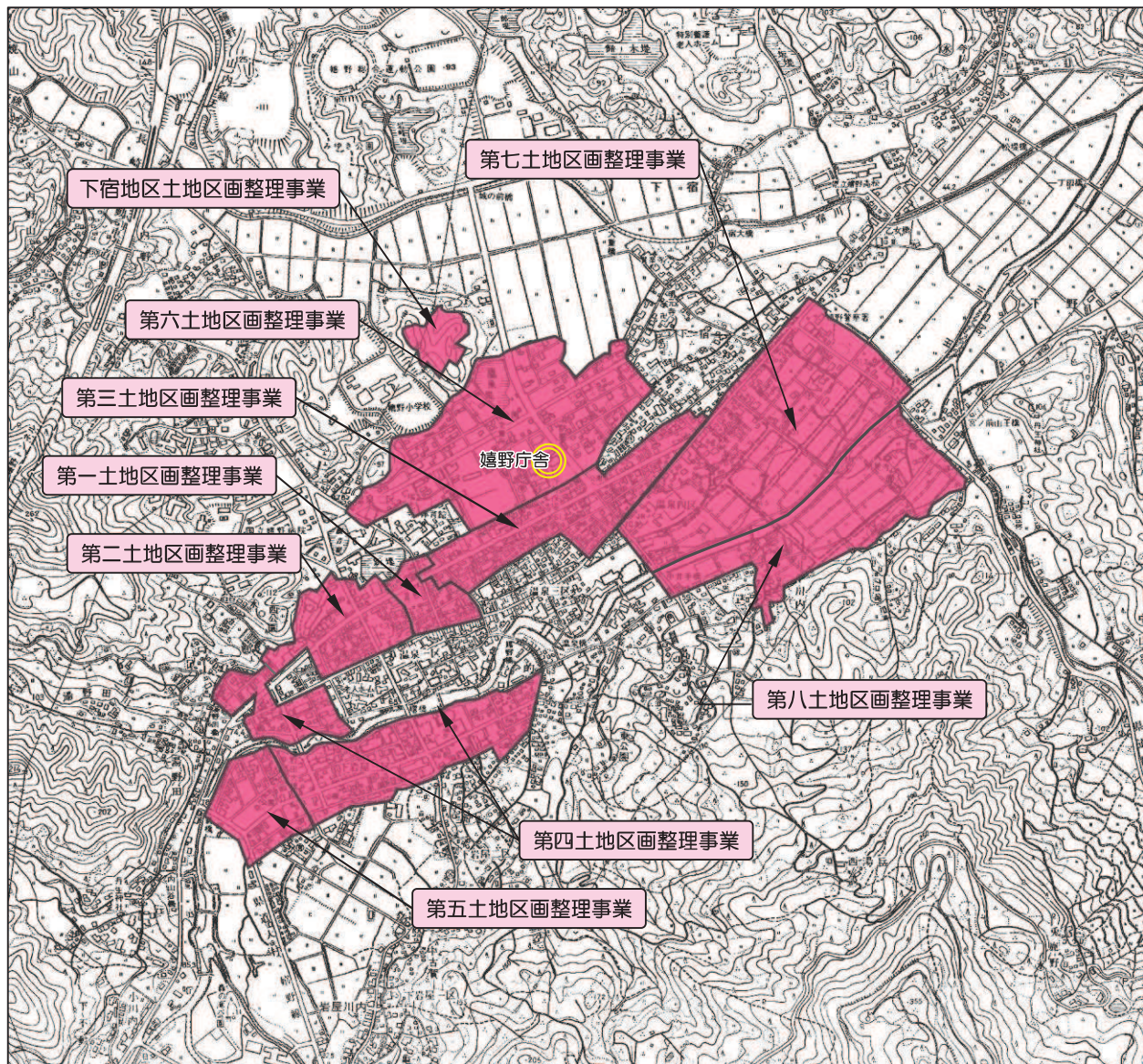
嬉野市では、嬉野温泉の古い温泉街の周辺部において、昭和17年から土地区画整理事業を手法とする市街地開発事業に取り組んでおり、平成23年度までに9地区、計117.9haの区域が市街地として整備されてきました。

その結果、市街地内の大半の道路網は比較的整然と配置されていますが、温泉街の中心部など事業区域外では老朽・密集化した市街地が広がっており、昭和50年以前に施行された古い土地区画整理事業区域においても、道路幅員が狭く、公園も不足しているなど、近年、大規模化している地震や大雨などの災害に弱い市街地構造となっています。

また、本市では九州新幹線嬉野温泉駅の設置が決まっており、駅が整備される既存市街地の隣接地では、駅周辺のまちづくりに向け、土地区画整理事業を軸とした新市街地の整備が進められています。

その他、塩田町内において工業団地造成事業(久間工業団地/8.5ha)が実施されています。

図 土地地区画整理事業実施状況

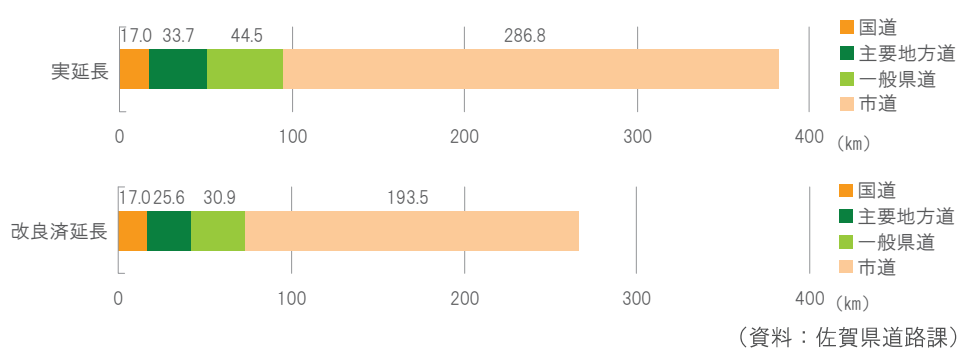


(土地地区画整理事業)

事業名	事業主体	施行面積 (ha)	事業期間	備考
第一土地地区画整理事業	組合	5.7	S17～S25	
第二土地地区画整理事業	嬉野市	8.5	S29～S33	嬉野町施行
第三土地地区画整理事業	嬉野市	11.4	S32～S42	嬉野町施行
第四土地地区画整理事業	嬉野市	17.8	S37～S48	嬉野町施行
第五土地地区画整理事業	嬉野市	5.8	S46～S59	嬉野町施行
第六土地地区画整理事業	嬉野市	24.0	S58～H2	嬉野町施行
第七土地地区画整理事業	嬉野市	26.9	H6～H23	
第八土地地区画整理事業	嬉野市	15.7	H9～H23	
下宿地区土地地区画整理事業	個人	2.1	H19～H22	

(2) 道路整備状況

嬉野市内を走る国県道の実延長は平成20年4月1日現在で95.3kmあり、国道が17.1km（100%改良済み）、主要地方道が33.7km（改良率75.8%）、一般県道が44.5km（改良率69.5%）、市道が286.8km（改良率67.5%）となっています。また、国道34号の嬉野市街地内区間において、景観性の向上と安全で快適な歩行空間の確保に向け、無電柱化推進事業、並びに交通安全施設等整備事業が進められています。



(主要道路機能)

道路交通センサスに基づいて嬉野市内における国県道など主要道路の断面交通量をみると、周辺都市と連絡する国道34号と同498号の一部区間で1万台/12時間を超えており、自動車の通行において渋滞が発生しているものと考えられます。また、平成11年から平成17年にかけて県道鹿島嬉野線の交通量が急激に増加しており、はたして武雄市、鹿島市との交通機能の強化や通行の円滑化に向けた整備の必要性が高まっています。

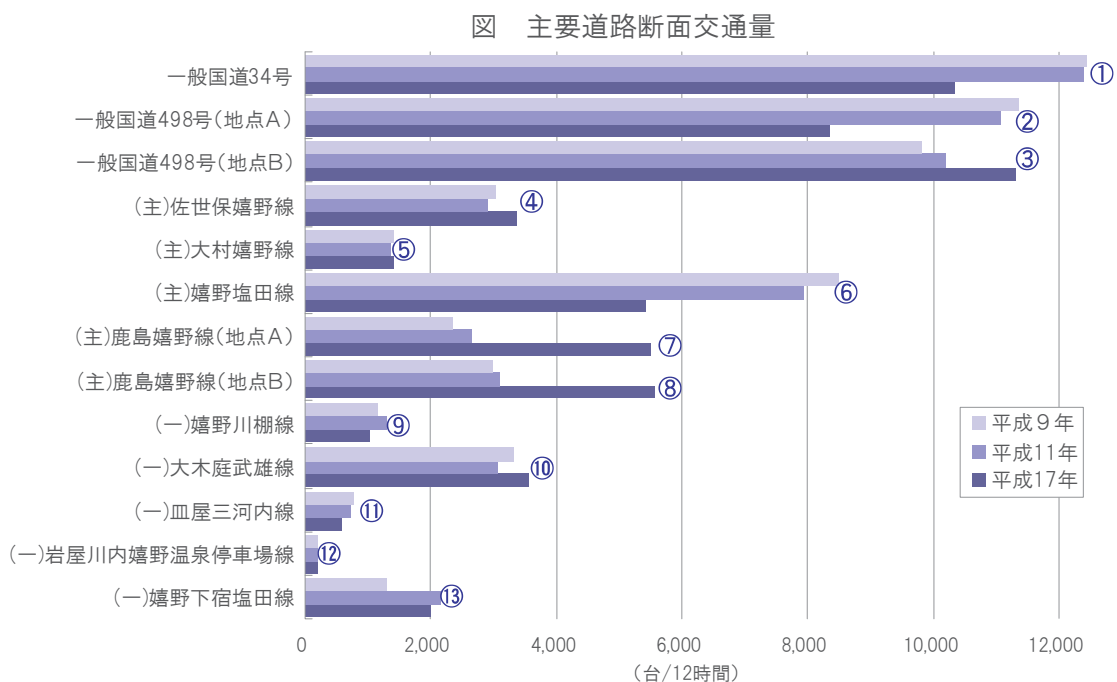
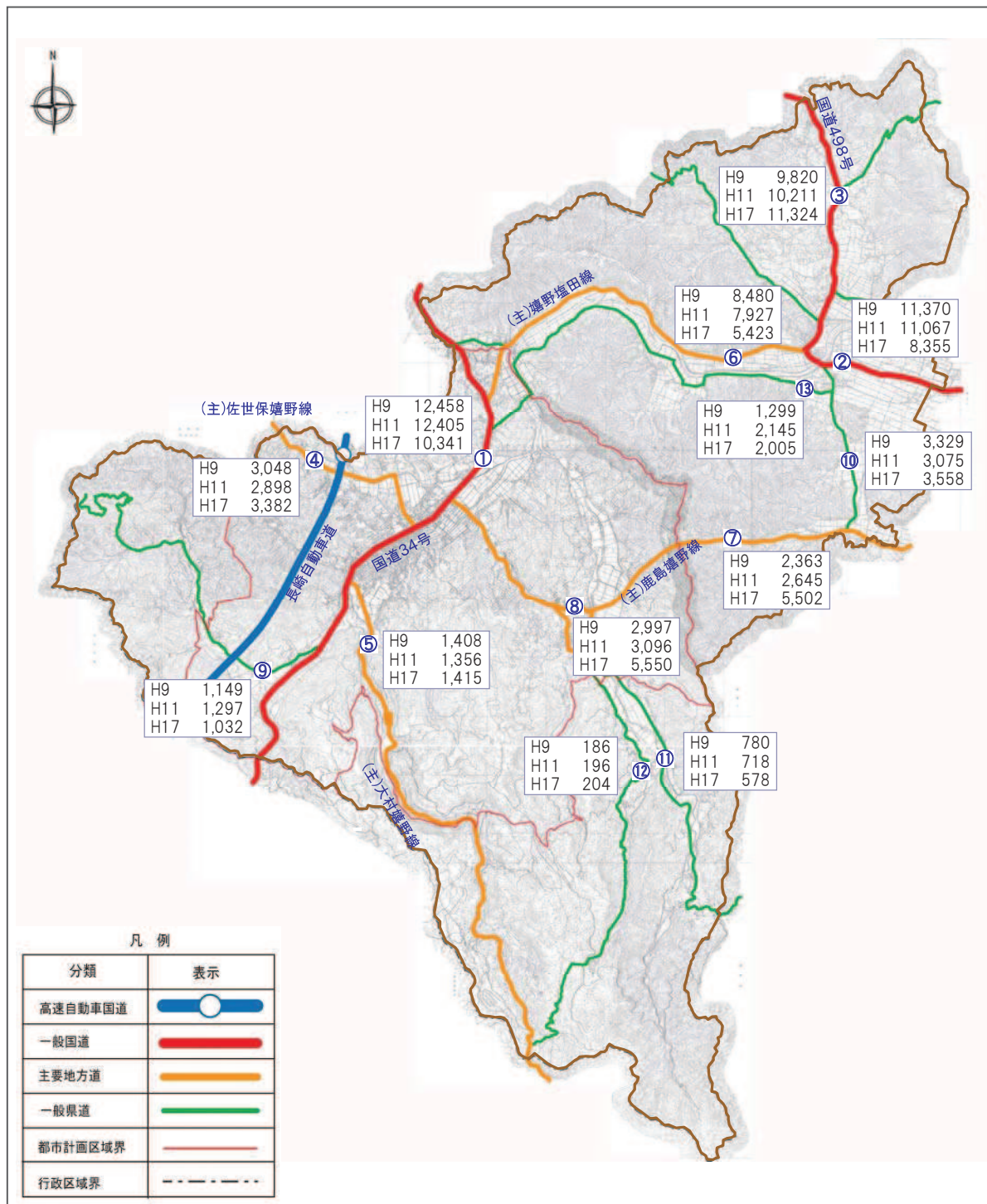


図 主要道路網・道路断面交通量

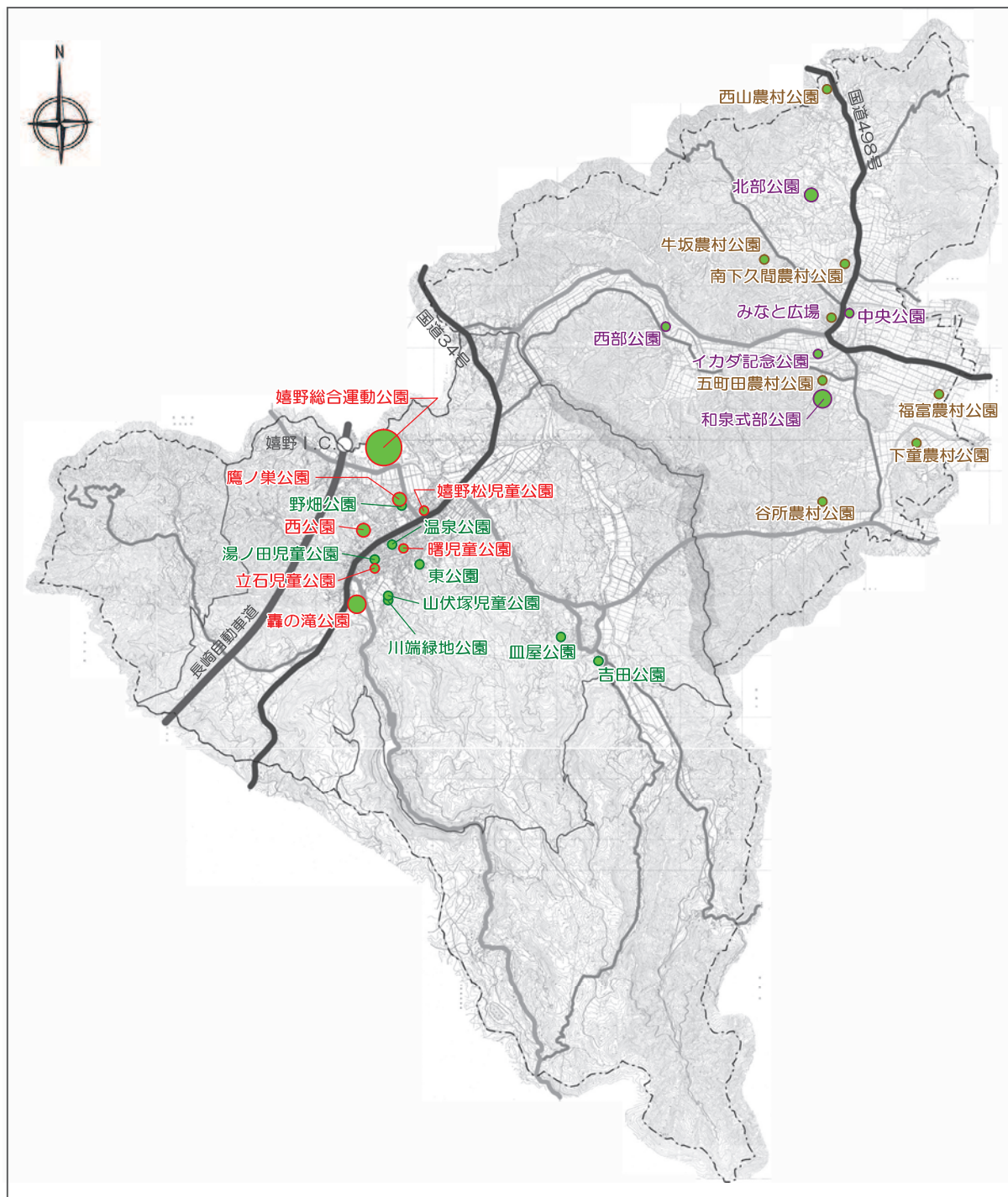


(3) 公園・緑地整備状況

嬉野市内では、嬉野町の都市計画区域内で都市公園法第二条に定義する都市公園が15箇所設置され、約57haの整備が進められています。

一方、塩田町内には、都市公園に含まれない和泉式部公園、中央公園、イカダ記念公園、北部公園、西部公園のほか、農村公園が6箇所整備されています。

図 公園配置状況



（都市計画道路率）

嬉野市では平成20年3月末現在、都市計画道路が15路線、計17.6kmが計画されており、そのうち整備済みと改良済みの区間が13.3km、概成済み区間が2.7kmで、概成済みを含めた改良率は91％（整備済み・改良済み区間のみの場合は76％）となっています。

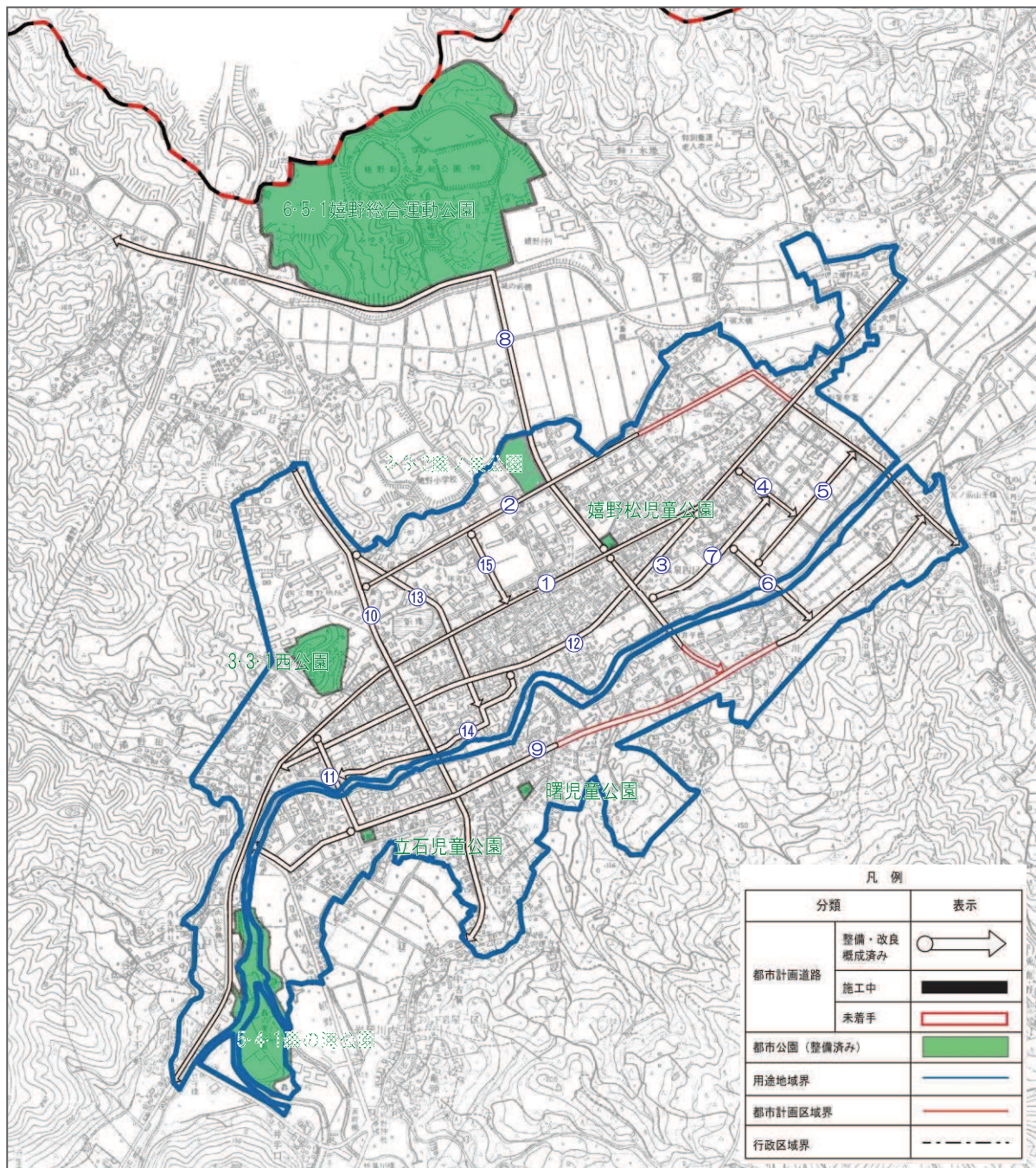
種別	路線名	幅員 (m)	延長 (m)	整備済 (m)	改良済 (m)	概成済 (m)	整備率 (%)	図中 番号
幹線道路	3・4・1 昭和通り線	16	3,600	1,640		1,960	45.6	①
	3・4・2 下宿大通り線	16	2,220	1,622			73.1	②
	3・4・3 中井手線	16	520			370	0.0	③
	3・4・4 八反角1号線	16	230	230	—	—	100.0	④
	3・4・5 八反角2号線	16	480	480	—	—	100.0	⑤
	3・4・6 八反角3号線	16	350	182	168		100.0	⑥
	3・4・7 八反角4号線	16	510	510	—	—	100.0	⑦
	3・5・8 総合運動公園線	14	2,180	2,180	—	—	100.0	⑧
	3・5・9 嬉野環状線	12	2,410	1,510	50		64.7	⑨
	3・5・10 病院通り線	12	1,570	1,210		360	77.1	⑩
	3・5・11 轟線	12	390	390	—	—	100.0	⑪
区画道路	7・6・1 旧本通り線	8	1,470	1,470	—	—	100.0	⑫
	7・6・2 楓ノ木通り線	8	650	650	—	—	100.0	⑬
	7・6・3 川端通り線	8	780	700			89.7	⑭
特殊道路	8・6・1 体育館通り線	8	250	250	—	—	100.0	⑮
計		—	17,610	13,024	218	2,690	75.2	

（都市計画公園）

都市計画法第四条第六項に規定する都市計画施設である都市計画公園は、平成21年4月時点で7箇所、計画総面積は54.05haであり、そのうち整備・供用済みは部分供用も含め7箇所、計52.33haとなっています。

種別	名称	面積 (ha)	供用 (ha)	整備率 (%)
街区公園	1 嬉野松児童公園	0.16	0.16	100.0
	2 曙児童公園	0.14	0.14	100.0
	3 立石児童公園	0.21	0.21	100.0
近隣公園	3・3・1 西公園	2.80	2.80	100.0
	3・3・2 鷹ノ巣公園	1.84	1.84	100.0
地区公園	5・4・1 轟の滝公園	6.60	6.60	100.0
運動公園	6・5・1 嬉野総合運動公園	42.40	40.58	95.7
計		54.15	52.33	96.6

図 都市計画道路・都市計画公園



(4) 河川・水路

嬉野市では、長崎県境にある虚空蔵山系に源を発する塩田川が、市域を貫流し、多良岳山系から流れる岩屋川内川や国見岳を源とする吉田川、武雄市堺から流れる八幡川など21の支流を集めて鹿島市沖の有明海に注いでいるほか、鹿島市との境付近に鹿島川が流れています。

特に塩田川は昭和に入る頃まで水運に利用されるなど、この地域の暮らしとの結びつきが強く、現在も嬉野温泉や塩田津の景観的な重要要素になっているなど、嬉野市のシンボリックな存在であり、また、その上流域では、ゲンジボタルの生息が確認されるなど、生物多様性が維持されており、自然の環境が残っています。

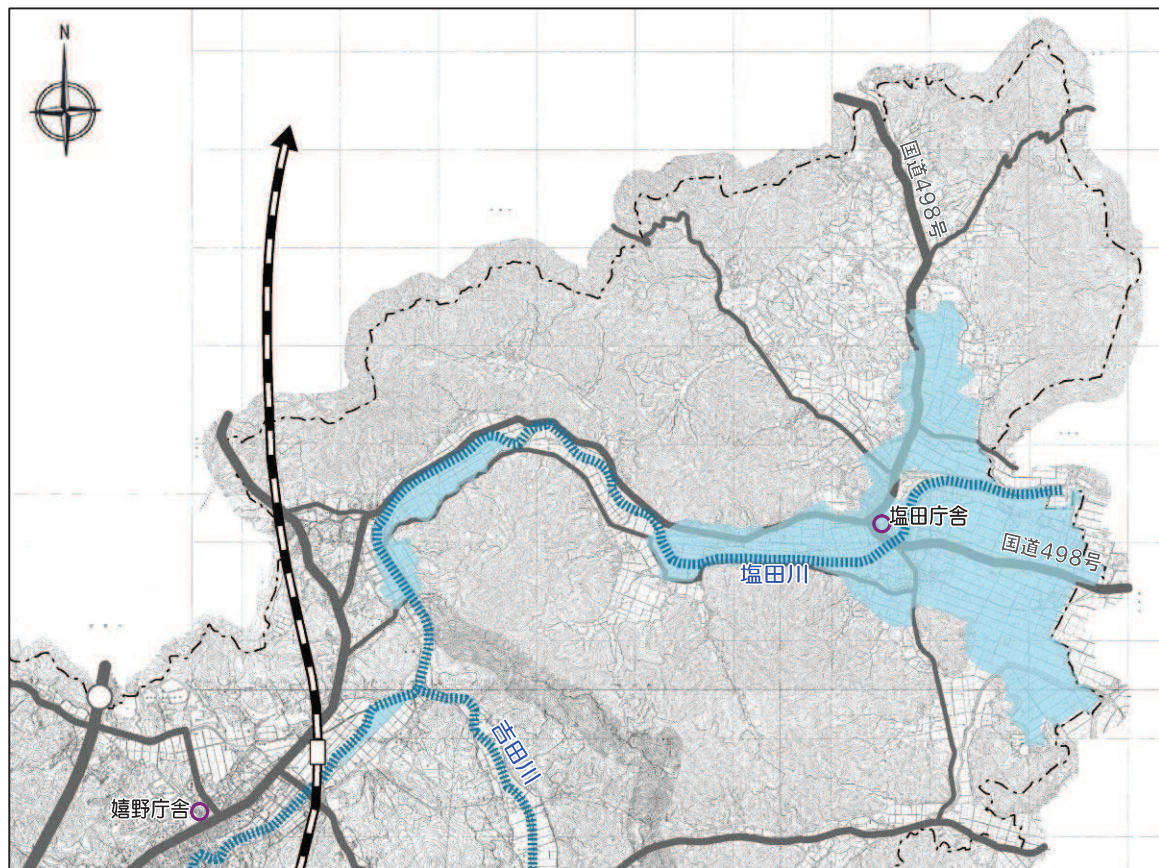
図 水系（塩田川流域）



一方、塩田川とその支流は流域面積が狭く、また、塩田川が注ぐ有明海の潮汐が大きい影響もあり、これまで台風などの大雨と有明海の満潮時が重なることによって、たびたび河川が氾濫し流域の市街地や農地に大きな被害をもたらしてきました。

塩田川の河川改修や、岩屋川内川及び吉田川上流における洪水調節を目的とした岩屋川内ダムと横竹ダムの建設など、これまでも治水対策が進められてきましたが、現在も塩田町を中心に洪水による浸水が想定されており、塩田川やその支流の整備は最も重要な課題となっています。

図 浸水想定区域



■ 整備諸元（ふるさとの川モデル事業）

塩田川は昭和 62 年度に「ふるさとの川モデル事業」の指定を受けており、「ぶれいりパーイン塩田」をメインテーマに、活気ある水辺空間の創出に向けた事業が進められています。

河川名	塩田川水系塩田川（2級河川）
流域面積	128km ² （計画地点流域面積102.1km ² ）
延長	26.1km
整備計画策定／区間	9.3km／ 自 大字大草野地先（式南橋） 至 大字真崎地先（牛間田橋）



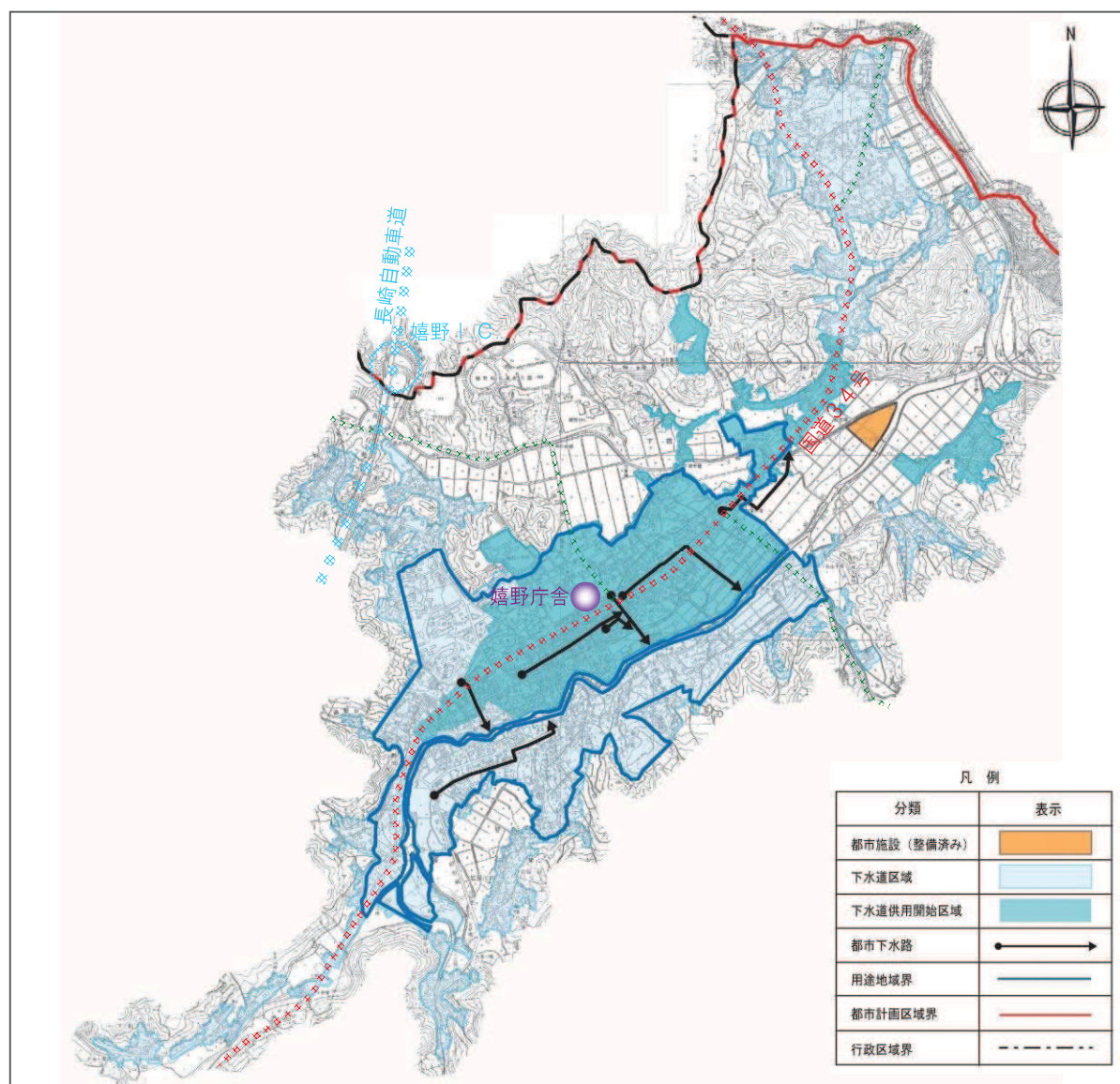
(5) 下水道（排水処理）

嬉野市では、嬉野市公共下水道計画において平成30年度の嬉野市の人口を21,000人、公共下水道の対象となる計画人口を14,700人と設定し、嬉野町内の453haの区域を対象とする公共下水道の整備を進めており、平成23年3月末現在、供用済みの排水区域面積は191ha、整備率は42.2%となっています。

その下水排除方式については、生活環境の改善と公共用水域の水質保全を基本に、汚水と雨水を別々の管路に流す分流式を採用しており、下水管渠の計画総延長は113,250mで、平成23年3月末現在45,050mが供用されています。さらに、下宿地区内の塩田川と下宿川に挟まれた27,000㎡の土地に浄化センターを計画しており、17,000㎡が整備済みとなっています。

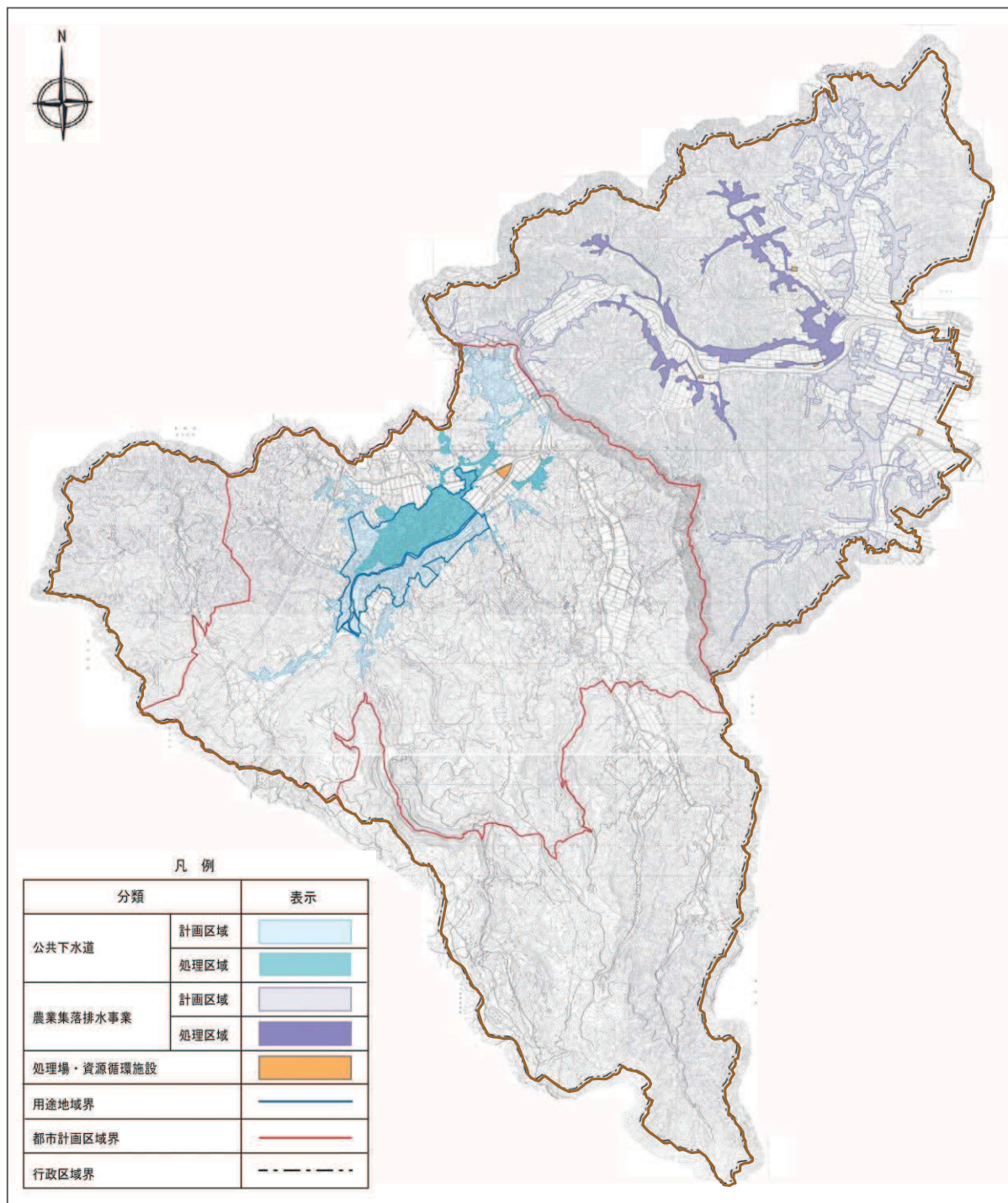
また、公共下水道の整備に関連し、雨水浸水の防除を目的とする都市下水路の整備を実施しており、平成22年3月末時点において計画排水区域216haに対し都市計画決定した6水路、管渠総延長3,695mがすべて供用されています。

図 公共下水道（供用・事業実施状況）



一方、塩田町内を主とする公共下水道区域以外では、農業振興地域において農村生活環境の改善と農業用排水の水質保全、公共用水域の水質保全を目的に、農業集落排水施設整備計画を策定し、污水处理施設の整備を進めています。

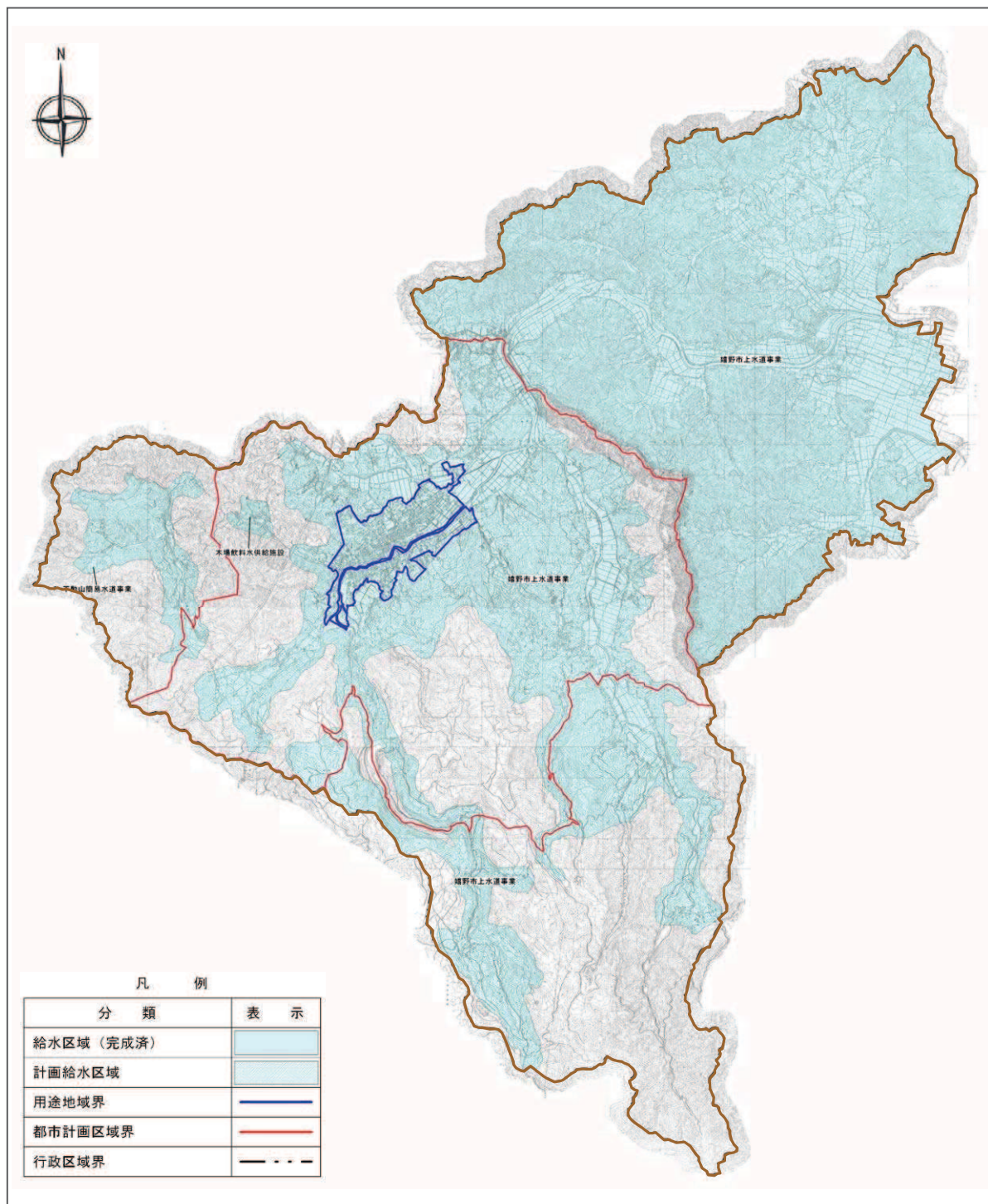
図 農業集落排水施設（整備状況）



(6) 上水道普及率

嬉野市では上水道事業、簡易水道事業によって山間部の除く居住可能な区域では上水道の普及が進んでいます。

図 上水道整備状況



6. 生活支援環境

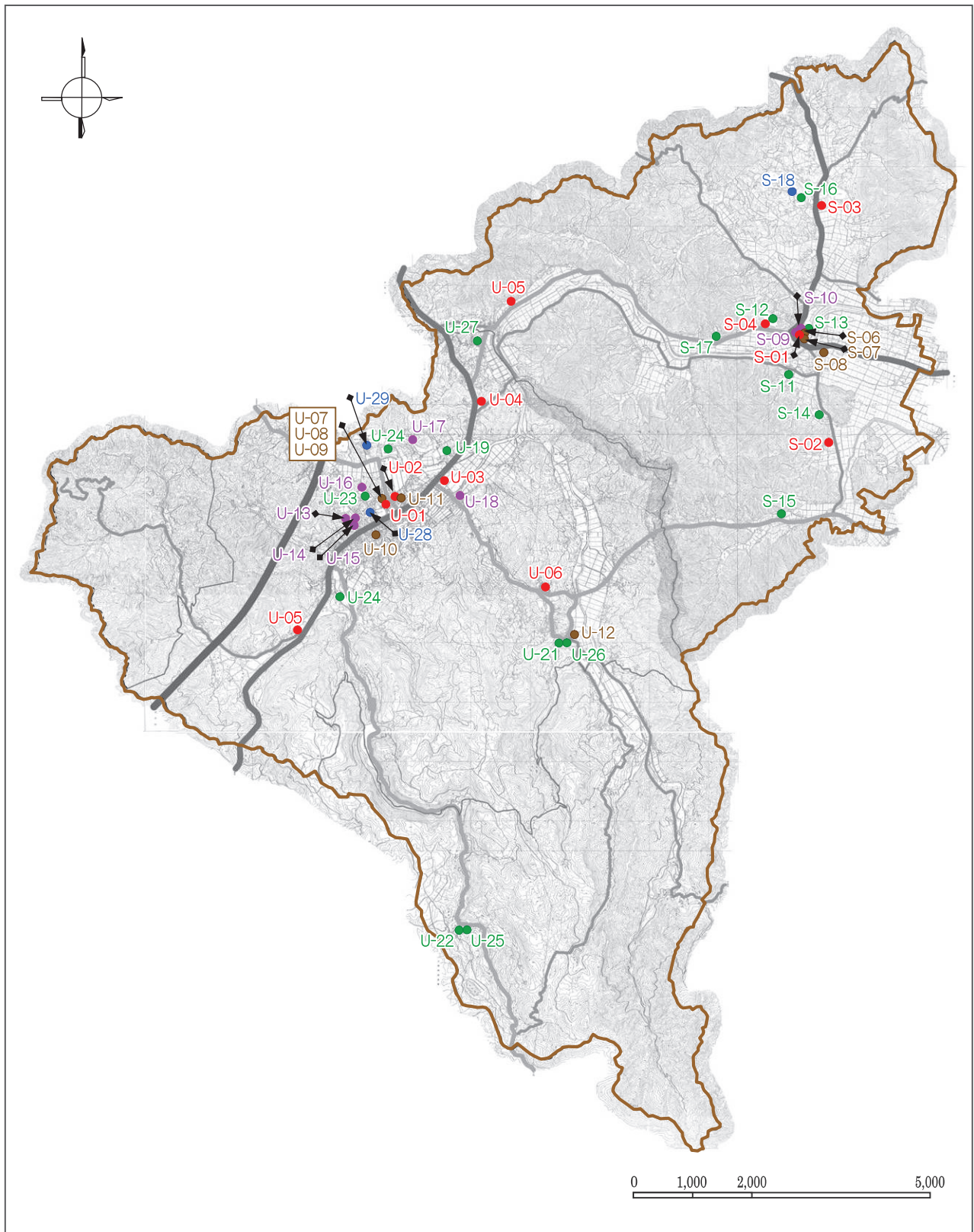
- 嬉野市は、塩田町と嬉野町が合併した都市であるため、公共公益機能・施設の重複がみられます。
- 嬉野庁舎周辺に主要な公共公益施設が集中しています。
- 九州新幹線西九州ルート建設に合わせ、嬉野温泉駅の設置が予定されています。
- 現在の主要な公共交通手段は定期バスですが、市内の旧町同士より武雄市など他市とのネットワークが基軸となっています。

(1) 公共公益施設

嬉野市内では塩田町、嬉野町それぞれに主要な公共公益施設(機能)が立地していますが、構造的・社会的に老朽化が進んでいる施設も多く、また、消防署や警察署、医療・福祉施設の立地では嬉野町内への偏りがみられます。

	嬉野町	U-	塩田町	S-
行政施設	嬉野市役所嬉野庁舎	01	嬉野市役所塩田庁舎	01
	嬉野消防署	02	五町田駐在所	02
	鹿島警察署嬉野幹部派出所	03	久間駐在所	03
	今寺駐在所	04	塩田駐在所	04
	不動山駐在所	05	大草野駐在所	05
	吉田駐在所	06		
文化施設	嬉野市文化センター	07	嬉野市中央公民館	06
	嬉野市公会堂	08	塩田図書館・歴史民族資料館	07
	嬉野図書館	09	嬉野市コミュニティセンター	08
	嬉野交流センター	10		
	嬉野公民館	11		
	吉田公民館	12		
医療・福祉施設	国立病院機構嬉野医療センター	13	保健センター	09
	老人福祉センター	14	老人福祉センター	10
	保健センター	15		
	嬉野保育所	16		
	特別養護老人ホームうれしの	17		
	嬉野デイサービスセンター春風荘	18		
教育施設	県立嬉野高等学校	19	県立うれしの特別支援学校	11
	市立嬉野中学校	20	県立塩田工業高等学校	12
	市立吉田中学校	21	市立塩田中学校	13
	市立大野原中学校	22	市立五町田小学校	14
	市立嬉野小学校	23	市立五町田小学校谷所分校	15
	市立轟小学校	24	市立久間小学校	16
	市立大野原小学校	25	市立塩田小学校	17
	市立吉田小学校	26		
	市立大草野小学校	27		
スポーツ施設	嬉野市体育館	28	北部公園野球場	18
	嬉野総合運動公園	29		

図 主要公益施設



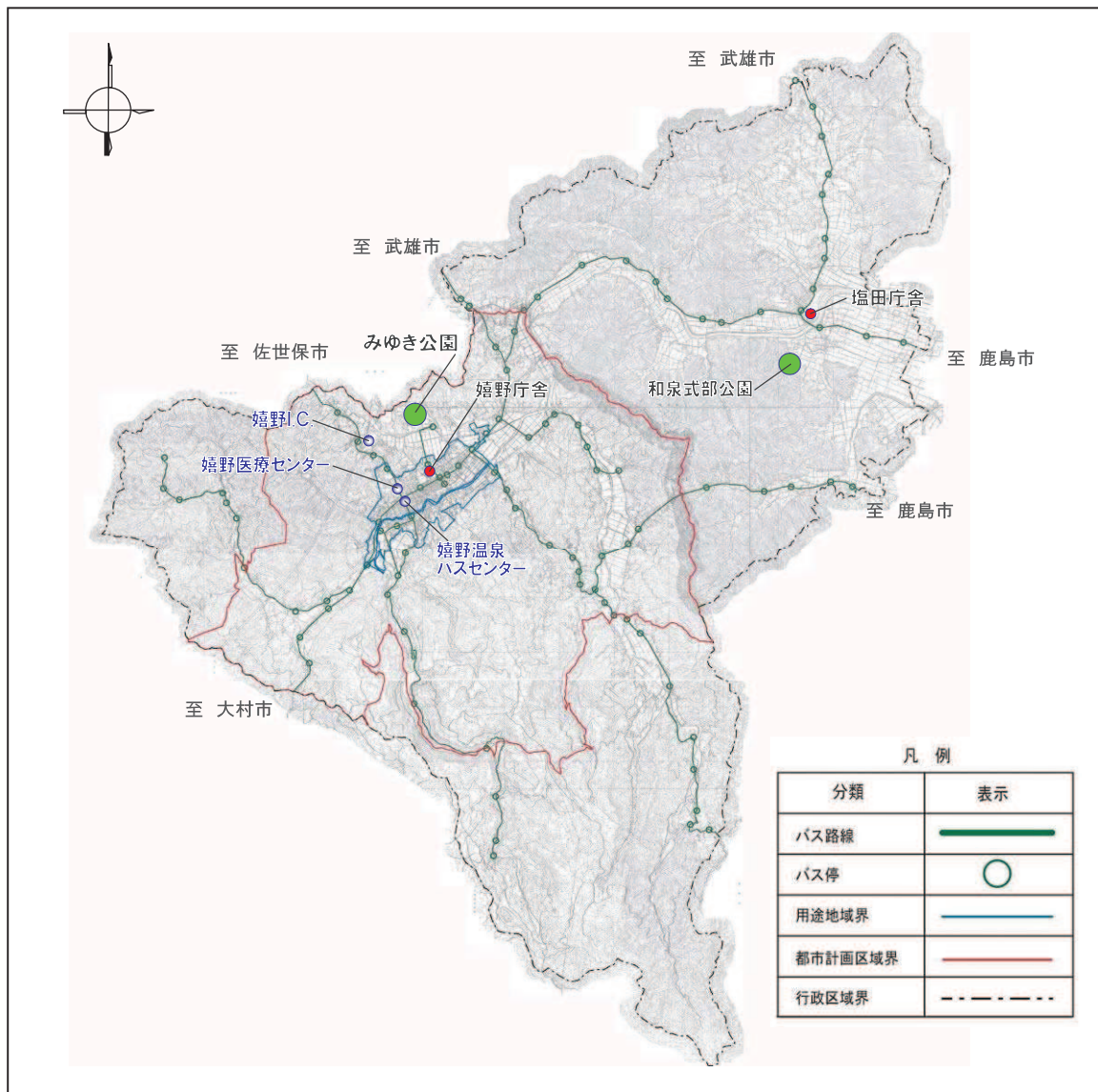
(2) 公共交通

現在、嬉野市の公共交通手段はバスとなり、ＪＲ九州バス(株)が武雄温泉駅～彼杵駅間を結ぶ路線、西肥バス(株)が嬉野温泉バスセンターを起点・終点に佐世保市と本市を結ぶ路線、祐徳バス(株)が塩田町を経由し祐徳稲荷～武雄温泉駅を結ぶ路線、同じく塩田町経由で祐徳稲荷・嬉野温泉間を結ぶ路線、鹿島バスセンター・嬉野温泉間を結ぶ路線を運行しており、市民の生活の足として機能しています。

また、博多駅・天神・福岡空港と長崎市を結ぶ九州急行バス(株)の高速バスが、嬉野Ｉ．Ｃ．と嬉野温泉バスセンターを経由して運行しています。

さらに、現在建設が進められている九州新幹線（西九州ルート）は、平成10年2月3日に武雄温泉・新大村間ルートの公表と合わせ、嬉野市内に嬉野温泉駅の設置が認められており、平成20年3月26日に本市を経由する武雄温泉～諫早間の着工が認可されています。

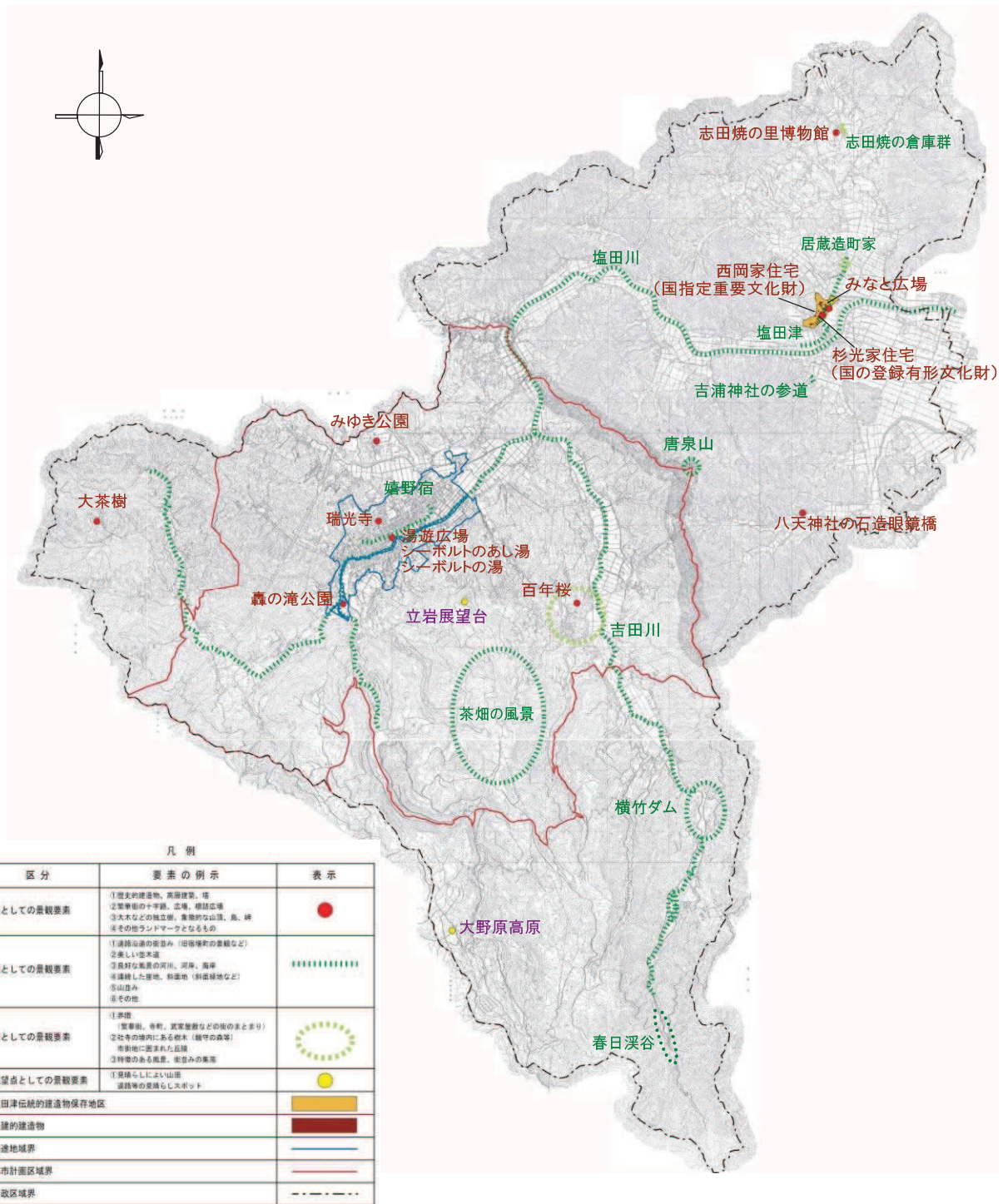
図 路線バス網



7. 景観資源

嬉野市は、市域の多くを山林が占めていますが、同時に長崎街道の要衝として栄えた宿場町・商家町の歴史を有し、今も市内各地に当時の面影を多く残していることから、面的に広がる自然の風景とともに、田園や建造物・構造物など人の手で作られた特色ある景観要素が分布しています。

特に国の選定を受けた塩田津伝統的建造物群保存地区（塩田津伝建地区）では、保存対策や塩田宿のボランティアガイド養成など、町並み保存が積極的に進められています。



8. 自然災害

(1) 地震被害

嬉野市は、約3000万年前に堆積したとみられる杵島層を基盤とし、塩田川が吉田川、八幡川など21の支流を抱えながら市の中央部を縦断し、有明海に注いでいます。

市西部の嬉野町では、藤津層と呼ばれる安山岩の下宿丘陵が位置し、市東部の塩田地域も、有明海側の一部干潟の地層を除く大半の地域が比較的安定した地盤となっています。また、虚空蔵山や唐泉山は、地質的には共に火砕岩と溶岩の互層となっています。

このように、本市においては、活断層に起因する内陸地震による被害は小さく、さらに、海洋性の巨大地震の震源となるプレート境界面から距離があることから、東日本大震災のような大規模な海溝型地震による被害も比較的小さいものと思われます。

しかしながら、我が国は世界有数の地震国であり、平成17年3月20日に発生した福岡県西方沖を震源とする地震では、本市でも震度5弱を観測し、屋根瓦の落下、壁面の亀裂、窓ガラス破損等の被害が記録されており、地震への備えは本市にも常に求められています。

さらに、本市には中山間地などにおいて急傾斜地崩壊危険地域が広く分布しており、地震の際には人口や建物が密集する市街地と共に注意を必要としています。

(2) 風水害被害

嬉野市は、自然的・社会的環境などから、台風、大雨、暴風雨等による風水害の被害を数多く受けており、特に有明海の満潮時における塩田川流域の氾濫が大きな被害をもたらしています。

また、本市には急傾斜地など地形的に不安定な山地丘陵が多くみられ、大雨等による土石流や斜面の崩壊が生じる危険箇所が多く分布しており、山崩れ、がけ崩れなどの危険性も高くなっています。

1-4 市民意向の把握

1. 意向調査アンケートの概要

嬉野市都市計画マスタープランの策定に際し、市民を対象に意識調査を実施し、都市の現状や将来に向けたまちづくりの方向性について、幅広い意見集約を行っています。

調査は無作為に選んだ20歳以上の市民2,500人の方々にアンケートを郵送する方法を用い、嬉野市の現状に対する満足度や、将来の都市づくり、緑の保全・整備に対する意見、アイデアをお伺いするもので、その結果は、全体構想並びに地域別構想における問題点・課題の抽出や、まちづくりの方針・取り組みの設定の評価材料となります。

(実施計画)

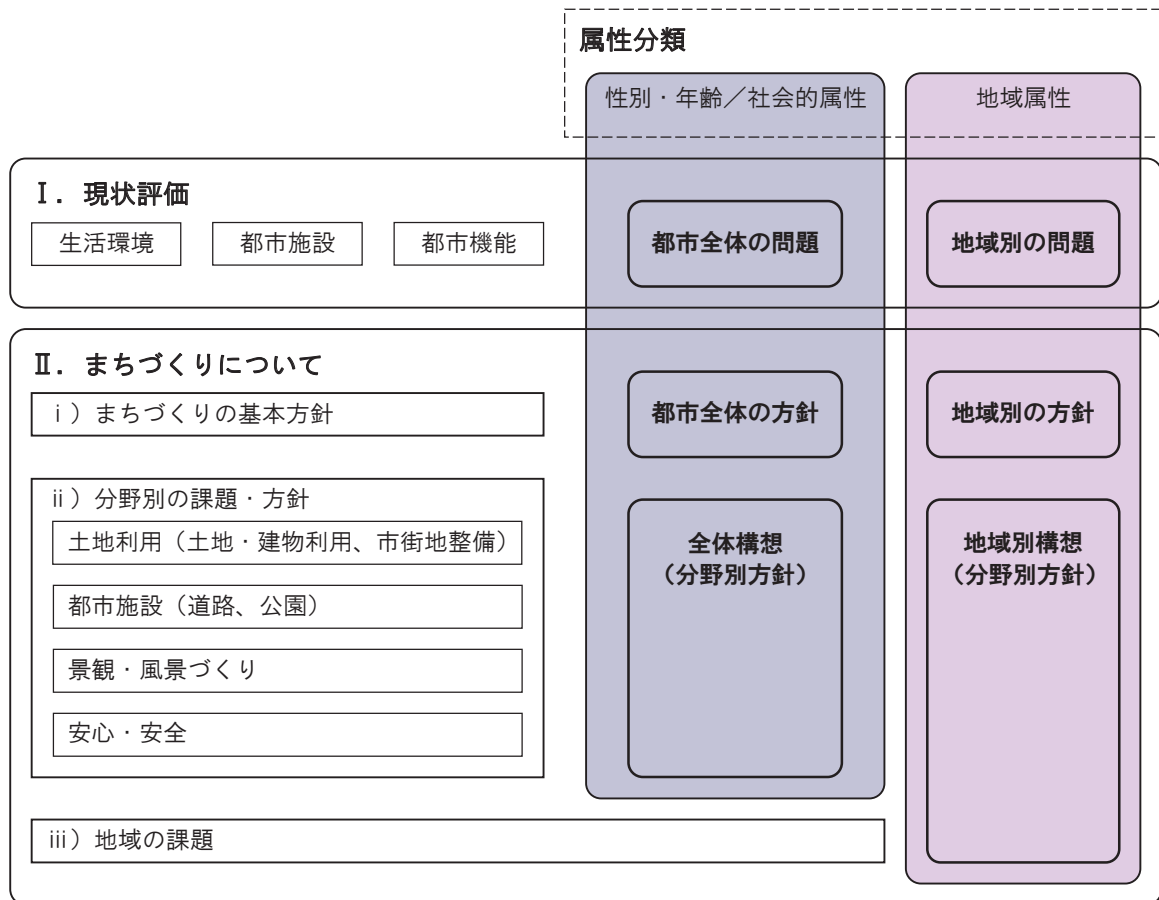
調査対象：満20歳以上の市民2,500人（比例配分法による層化無作為抽出）

実施期間：平成21年11月1日 ～ 平成21年11月15日

調査方法：郵送配布・郵送回収

回収率：有効回答率28%（有効回答数：702）

図 アンケート（設問）構成



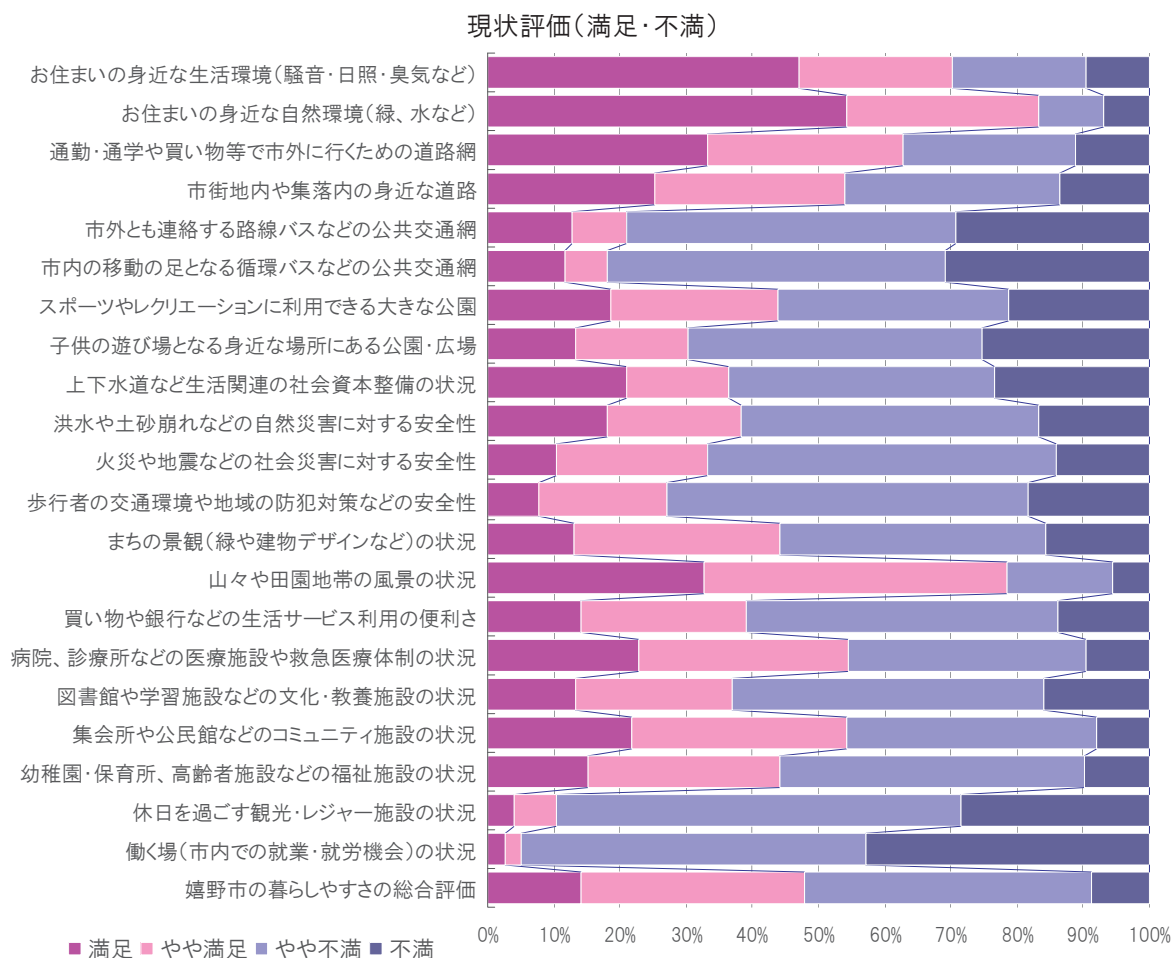
2. 市民意識（アンケート結果）

（1）現在の嬉野市の状況について

身近な生活環境や自然環境、自然や農の風景に対する満足度が高く、道路網については市外と連絡する幹線道路、市街地や集落内の生活道路ともに比較的満足している結果となりました。その他、医療施設や救急医療体制、コミュニティ施設については50%以上の割合で概ね満足しているようです。

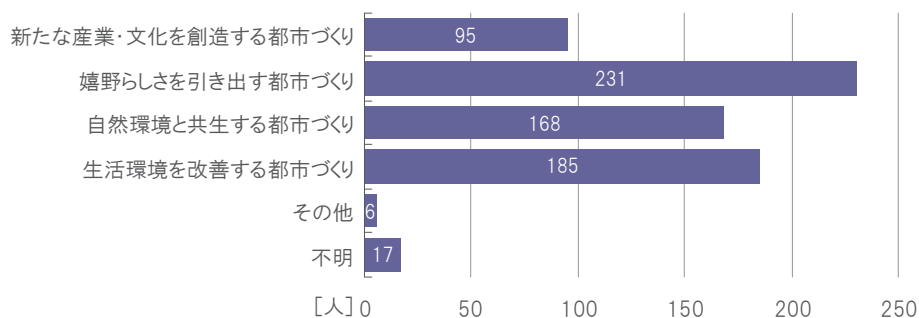
一方、市内での働く場や余暇施設、バスなどの公共交通機関については不満とする割合が高く、中でも市内での就業・就労機会については、極端に満足度が低い結果となっており、実際の現況データでも示されている低い中夜間人口比率や小規模な商工業規模が、市民の視点からみても明確に示されています。

その他、まちの景観や身近な公園、歩行者交通環境や地域防犯対策や、文化・教養施設の充実、自然災害や社会災害対策、生活サービスの利便性などへの不満がみられます。



(2) 都市づくりの基本方針について

都市づくりの基本方針に対する市民の考えは「嬉野らしさを引き出す都市づくり」が最も多く、次いで「生活環境を改善する都市づくり」、「自然環境と共生する都市づくり」となっています。



(3) 整備・開発・保全に方針について

都市の整備・開発・保全に関しては「農業の保全」が最も多く、僅差で「工業地の整備」がづいています。また、「商業地の整備」を希望する意見も一定数みられますが、「住宅地の整備」を希望する意見は多くありません。

